



東洋學藝雜誌第四卷第六十九號

明治二十年六月二十五日發兌

○ 自殺の話 (前號の續)

大學通俗講談會よ於て

法科大學教授 穗積陳重 講演

林 茂 淳 筆記

又、罪人も常人よ比すれば自殺の度が非常よ高い者です。其理由ハ、國法を犯して牢獄よ繋かれ、憂憤交も至る時ハ、兎角に精神の平均を失ひ、自ら生命を棄るの念を生ずる事多き故であります。已れの犯罪を公衆に知らる、を恥ぢて公判以前よ此世を逃亡いたします未決囚もありますし、獄卒の手よ掛るよりは寧ろ自ら死刑の執行者たるを擇ぶ既決囚もありますし、或は冤罪を憤ふり、或ハ先非を悔ひ、監守の目を窺みて自死する者が餘程多くあります。兎よ角囚徒は自由人民よ比すれば自殺の割合が多いに相違ありません。

囚徒の自殺を企てまする時期ハ、入監以來、一箇年の内が最

も多いと申しませ。歐洲諸國の統計によれば、囚徒の自殺の半數以上ハ最初の十二ヶ月以内にありませ。是ハ獄に繋かれた當分の其屈辱苦痛を感ずるも最も強いからで御座います。一年をも通り越しませと、日々よ獄窓の生活に慣れ、從つて其苦を感ずるの度も薄らぎ、自殺の傾きも減ずると見へませ。

又囚徒の種類から申しませと、先づ第一よ人身に對する罪、即ち殺傷毆闘等を犯しませた者が最も多く、夫れから財産よ對する罪を犯したる者でハ、中等以上の人民で、詐偽取財、監守盜、詐偽倒産等を爲しませた者が多く自殺いたしませ。之よ反ハ巷賊泥坊放火其他恒慣犯者は、性質頑陋よして智識教育に乏しく、素よりシブトイ奴等でありませから中々自滅いたしませせん。

囚徒自殺者の年齢ハ常人よりハ早く、伊多利の統計表よよりませれば、二十歳より三十歳までを以て最高度といたしませ。又監獄の種類より云へば別房制の監獄を以て最も多しといたしませ。

第九季候日時と自殺との關係

通俗三國志などを讀んで見ますと、金星光りを失ふとか、大白星地は墜ちるとかにて、戰の勝敗大將の生死等も占ふ事を得る者としてあります。總じて古代の天文學者の、日月星辰と人間の運命との大なる關係あるを説き、數百年の物笑ひとなりましたが、近頃に至り又ぐる天象と地象及人事との間著しき關係あるを説くに至りました。例へば、太陽の斑点が多く見ゆる年の氣候が不順で、之が爲めは農業商業に變動を起す等の事實が追々分りて來た如きものです。モルセリ氏の太陽と地球との距離により自殺の數は差違を生るを説きて「地球最も太陽に遠ざかり軌道の最遠位（アヘリオン）に在る時は自殺の數最高度は達し地球最も太陽に近つき軌道の最近位（ペリヘリオン）に在る時は自殺最低度は達す」と申しました。月も就て論じましたれば、一月より七月迄漸々に増加し七月に至り最高度は達し夫れより歳末迄漸々に減少して居ります。七月に自殺の最高度は達しまするは、此時分は人心が激動し易いからでありましたやう。古來大革命、國事犯等も此月を以て最も多しといはれます。

日と自殺との關係を示しましたるポアスモン氏の統計表を觀まると、佛國に於ては、月始の十日間最も多く、殘りの二十日間も超へ、又月始の二日間、一ヶ月中最も自殺多き日であります。

一週日に就て云へば、月曜が最も多く、夫れより火曜、水曜と減少し、土曜日が一番少くあります。日曜は休日故か自殺の數も最も少くあります、（笑）然し婦人計りの統計の前の比例と異りて、日曜最も多く、木金兩曜之より次ぎ、月火の兩曜は又少く、土曜日男子の通り最も少くあります。時刻は關しましては、ポアスモン氏が巴里府に於て一千九百九十三人の自殺者より調べました統計は左の通りであります。

第六表

自殺時刻表			
晝		夜	
時	人員	時	人員
6	102	6	67
7	102	7	89
8	126	8	69
9	104	9	69
10	110	10	62
11	81	11	44
12	123	12	65
1	79	1	51
2	117	2	49
3	144	3	45
4	89	4	50
5	86	5	70
計	1,263		730

右の表よりまれば、午前六時より正午迄の平均より多く、午後二時より三時迄を以て最高度と致します私に此統計表を觀まると前より、自殺の多い時刻の草木も眠ると申す丑三つの頃か、兎に角夜中あらんと豫想して居りましたが、案外の統計表で、まだ充分なる説明をいたす事が出来ません。

前に述べました通り、自殺の月の始め、週の始め、日の午前にも多いと申します理由の自殺の變動の跡に多しと申す理由でもありまじやうか。總じて商業上、社會上の變動があり、戦争があるとか、物價が騰貴するとか、租税が増加するとかの如き時に、其變動中の却て氣力が張り居る故か自殺が少いものですが其變動後に至るとガツカリとして張り氣も弛む故にや自殺の數も一時に増加いたしました。例へばクリミヤの戦争、一千八百五十八年のオーストリアの戦争、一千八百七十年の普佛の戦争等の翌年及翌々年より自殺者の數が非常に増加いたしました。是れは變動の結果を感ずるに變動の時よあらずして却て其跡よあるが故かと思はれます。

第十男女と自殺の關係

男女自殺者の割合に關しよる統計の、既に數十年以前より分つて居りますが、其統計の結果を一言よ申しますれば三男一女の割合にて、歐洲各國の比例を平均しよれば男三人の自殺者よ女一人を以て常數といはれまじ。尤も大都府よ於きましては自殺者の比例或は男二人よ付女一人位に迄上る事があります。

第七表

自殺の割合		百人=付	
男	女	男	女
プロシヤ	82	18	
イタリヤ	80	20	
ロシヤ	80	20	
フランス	79	21	
アメリカ	79	21	
オランダ	78	22	
サキツニー	77	23	
イギリス	73	27	
イスパニヤ	71	29	
日本	65	35	
合計	764	236	

右の表によれば、男の比例の最も多きは普魯西で、殆んど男四人半と女一人に當り、最も女の割合多きは日本で男一人八分よ付女一人に當ります。日本よて簡様な女の自殺者が多いのはなぜでありまじやう。情死等の風習ある故でしやうか、女を忍らい目よ遭はせる故でしやうか。

又ハ統計の取り方がまだ不充分なのでありましてやうか、
 兎に角日本ほど女の自殺者が多い國ハ見へません。諸國
 の統計を平均しますと男三、一九に付女一、一當りま。男
 子の自殺者の多きは、前の原則に隨ひ男子ハ生存競争の
 衝に當る事多き故であります。

第十一年齡と自殺との關係

自殺の年齡も前の原則により世事の衝局ハ當る事最も劇
 しき時分が最も多ふあります。故ハ國々の風土ハより、
 其人民の體質早く成熟いたします國ハ於てハ自殺の最
 高度ハ達しまする年齡も自づから早ラ御座います。故ハ
 暖帶諸國自殺者の年齡ハ寒帶諸國ハ比シ余程早くありま
 す。歐洲全体を通算しますれば、自殺の數ハ幼稚より五
 十五歳迄漸々ハ増シ、夫れより減少ハ向ひま。然シ自
 殺の最も多いハ四十歳より五十歳の間にあります。

男子ハ女子に比すれを體質の發達ハ遅キ故、男子自殺の
 最大數に達する年齡ハ女子ハ比すれば遅い道理で。現
 ハ歐洲諸國の統計によれば男子の最高度ハ達するハ四十
 歳以後でありますが、女子の最高度に達するハ三十歳以

前ハあります。

第八表

自殺者年齡表		
年 齡	男	女
1—16	3.5	0.9
16—20	19.1	8.8
21—30	91.3	29.2
31—40	161.3	23.2
41—50	206.3	35.0
51—60	201.7	34.2
61—70	146.3	27.9
70 以上	93.7	19.4

第十二結婚と自殺との關係

結婚と自殺との反比例を爲すとハ夙に統計家の注目した
 る事實であります。現に和蘭那威等の如く。結婚の比例増
 加する國でハ自殺の比例減少します、又英佛獨澳伊諸國
 の如く、結婚の比例減する國にては自殺の比例が増しま
 す。是れを生活の度が進み、生存競争が劇しくなると、結
 婚ハ六ヶしくなるからです。

離婚ハ婦人の自殺の原因となり。又戦争ハ寡婦の自殺の
 原因とあるは。普佛戦争後兩國共に寡婦の自殺が非常に
 殖へたのでも分ります

子の有無も自殺に大關係があります。總じて子ある者の
 愛情の絆キツナハ引かされま。自殺を爲す事も自づか

ら少なくあります。「子の三界の首かせ」といよく言つた者でありませんか。之に反し離婚者の中で、子のある者に却て自殺者が多いと申します

第九表

甲

國名	結婚者	未婚者	鰥寡
フランス	100	104	160
イタリヤ	100	114	198
ウルテムベルグ	100	147	162

一千八百八十二年調

第十三自殺の方法

生命を絶つの方法ハ實に千種萬様で。其方法を算へ盡す事ハ中々出来難い事でありませ。然しベンサム氏も申しました通り「人の苦樂の奴隸」で死に至る迄、兎角に苦を避けて樂よ就く者と見へませ。故よ自殺の方法種々ありと雖も概して次の四つの性質を具ふる方法を選びませ

第一成るべく苦痛の少きもの

第二成るべく確かに死するもの

第三成るべく早く死するもの

第四成るべく体裁の善きもの

右の四つの原素を兼る事多ければ多い程人望のある方法と云ひなければなりません。

從來普通に行はれたる自死の方法を擧げませ

第一縊死 第二溺死 第三銃死 第四傷死 第五毒死

第六投死 第七窒死 第八壓死 第九餓死 第十焼死

其他は尚ほあるかも知れませんが、先づ是れ位で澤山と致しましやう。右の方法ハ國々の風土人情によりて多少其用ゆる所を異にします。例へば魯西亞の如き寒き國柄でハ、戶外より出る事が少く、且つ法律にて常人に兵器を所持する事を許しませんから、溺死傷死等ハ少く、縊死が多くあります。又伊多利の如き暖き國にてハ、入水者多く、白耳義英吉利の如き鐵道多き國でハ、壓死多き如き者です。右の方法に付て少し御話を致しましやう
(一)縊死 即ち首縊りの萬國普通に行はる、方法で、第十表にて御覽あさる、通り、歐羅巴にてハ一番數の多い

自死法であります。就中日耳曼人魯西亞人は最も此方法を好むと申します。我邦にても古代より行われ、尊き御方も此方も此法により崩御ましくたる事も正史に見へまゝあるが、其後兵政盛んあるに及んで武士の傷死を潔とし、此方法を愧るに至り、縊死の主として婦女子及百姓町人の徒にのみ行われた様でと。伊多利にても縊死を愧るの風があると申す事です。

(一) 溺死 溺死の氣候の寒暖によりて差別があります。位置より云へば、魯西亞の如き寒國に少く、伊多利佛蘭西の如き暖國に多くあります。又季節より云へば、夏に多く冬に少く。是れの前は陳べたる如く、人間の死に至る迄慾心を離れず、最も愉き方法を求むる証據であります。

婦女子の特に入水によりて生命を絶つを好み、其割合男子に比すれば殆んど二倍すと申します。從來溺死者を土左衛門と稱し男子が其稱号を専有致し來りましたが、是れは統計上の事實は違ひまゝから、此後の改良して阿土左とか何とか稱する方却て適當かと思はれます(大笑) 溺死の多い場所、海岸等の如き水多き場所かと尋て見

ますると、必らずうふ其確言し難ふ御座います。是等の場所の住民は游泳を心得て居りますから、其目的を達する事が出来ません。最も多い場所の市中に大河の通じたる所若くは來世に因縁ある淵河神佛の護り玉ふ池湖等であります。

昔より名高き溺死は、橘姫、平知盛、僧月照、阿半長右衛門の類頗る多くあります。

(二) 銃死 銃死の鐵砲を取扱ふ軍人獵師等に多く行はれ歐洲にても獨澳の境界の如く鎮臺あるの地、又伊多利瑞西あどに多く行われ、其他の諸國にてもピストルにて自殺する者の頗る多く、其數は却て傷死の上にある、第十表に示す通りであります。我邦よては古來時々鐵砲腹など云ふ事もありましたが、一体銃死の極て稀れにて、歐洲諸國に反し傷死の數の遙かよ銃死の上であります。

(四) 傷死 傷死の身体を傷けて死せるの方法で、咽喉を斷ち、腹を切り、首を刎ね、脈管を開く等種々の方法があります。

現は先年土留其帝アブダル、アヂツハ鉄を以て腕の動脈

を開きて自殺致しました。

總じて傷死ハ帶刀の國に多くあります。故に我邦の武士ハ例の二本を指して居りましたから、男子ハ切腹、女子ハ喉を斷つを以て常習といたしました。

又歴史上に時々自刎とて、我と我首を刎ねる事が記してありますが、是ハ前に陳べました元素を欠き、随分苦痛がありまして、非常の強情者でなくてハトテも之を仕遂る事ハ出来ませんから甚だ稀であります。

(五)毒死 毒死ハ近世に至り追々盛んに行はる、傾向があります。毒藥の中でも麻睡劑の如きを、前よ述へました元素を具へて居りますのら、阿片劑、クロ、フォルムノ類を用ゆる者ハ頗る多くあります。又モルヒ子岩見銀山なども随分行はれます。

毒死ハ醫者醫學生などの如く藥品を取扱ふ者に多くあります。又歴史に烈火を呑んで死すなど云ふ事も載てあります。又一千八百八十年に倫敦で客齋お老婆が貨幣を呑んで自殺しましたが、是れも矢張り毒死の中にも入れずハ仕方がありますまい。我邦よても藥子以來毒死の例

ハ随分あります、

(六)投死 高臺高樓等より飛び降りて自死するのは丁度都合よき場所のある國にてハ随分行はる、者です。例へば寺院、高塔、紀念碑、舞臺、絶崖等のある所よてハ投死多く行はれ、ミランのドオモ、羅馬のセント、ペートルス、倫敦のハイゲート橋、印度にてマデオ山の絶壁、日本にて清水の舞臺等ハ皆投死に名高き場所であります。又無暗に高名を博する爲に伊多利のベスピヤス火山の噴火口よ飛び入る者も時々あります。又エムピトールと云へる哲學者は、エトナ山の火口よ投じて死しました。同氏の哲學よりハ却て死よ方の奇なるに因て其名を知られました。

(七)壓死 壓死ハ車の多い國よ行はれます。既に印度にてもジュツガルナの聖王の車輪に壓されて死しまするを以て信仰の所爲と致します。近來よ至り鉄道ハ十萬億土の近道とでも心得ますにや、鉄道往生が追々盛んに行はる、よ至ります。我邦よても此後ハ必らず壓死の數が増加するよ相違ありません。英國に於てハ一千八百八十一年に鉄道よて自殺せし者五十八一千八百八十二年にハ五

十六人でありました。

(八)窒死 窒死とは毒氣を吸入して死する方法にて、例へば小室を密閉し木炭を焚きて炭酸氣を吸ふが如き事を申します。近來佛蘭西にてハ此方法大に行われ、漸く他の國にも傳播するの勢がありまゝ。近頃倫敦よて瓦斯管より瓦斯を吸入して死せる者がありました。

(九)餓死 餓死ハ前に申しました第三の元素を欠きまするから多くハ行われません。歐羅巴よてハ古代希臘のストイツク哲學盛んに行はる、時分にハ餓死も隨分行はれたものです。近來ハ甚だ少く成りました。故に第十表にも餓死と燒死ハ載せません。

印度にてハ宗教上の自殺行はれ、ブ라마教の自殺にハ五つの仕方ありますが、其中で斷食を以て最も尊ぶ可き方法といはれます。又之に反し大食死とか喰ひ死にとか名くべき自殺があります。フォルグス氏の記す所によりますれば、熱心なるブ라마信徒ハ神前にて死する迄喰ひ續けるとありますが、是れハ餓死よりハ却て苦しむ御座いませう。又印度ではシツチング、ヅルナと稱し、貸金の期

限を過ぎて返さぬと、負債主ハ債主の門前に坐を占めて斷食を始め、右の借金を拂ふ迄ハ決して喰ひません。是ハ中々手強い居催促でと。(笑)印度でハ債主が門前に餓死するを非常に恥ると申しますが、横着な金借りハ却て債主の餓死を待ち兼ねるかも知れません。支那でハ諸君も御存しの通り伯夷叔齊が最も有名なる餓死者であります。

(十)燒死 右に陳べました自殺の方法中で、一番少きのハ燒死でありませう。是ハ狂人か又は非常に迫りたる場合に限りまゝ。我邦の歴史にも狹穗姫皇后右大臣信長其他一二の焚死の例ハ見へまゝ。印度のブ라마教にてハ燒死を自殺の第四の方法とし、神牛の糞を乾かし之に身体を埋めて焚死すれば天堂に昇ると云ひまゝ。又彼の有名あるスッチー即ち寡婦准死ハ、夫の死後ハ燒死するの風習であります。近頃ハ法律を以て之を嚴禁しました。千八百八十一年の倫敦の警察報告の中に、或る人破裂彈を三つ計り桃太郎の黍團子と云ふ鹽梅ハ腰に縊り付け、マツチにて導火に點火し、霹靂一聲ズドーンと破裂させ

粉ふ微塵よ成つて死んだ者があります。是れの中々活潑
あやり方で御座います(大笑)

第十表

自殺方法表						
千人に付						
方法	イギリス	プロシヤ	イタリヤ	スウヰツル	ベルギー	フランス
縊死	368	608	167	430	545	450
溺死	208	182	300	267	228	290
銃死	46	109	244	170	118	110
傷死	206	54	55	67	39	40
毒死	94	30	61	33	23	20
投死	20	9	113	11	15	30
窒死	30	3	22	13	4	70

第十四救正法

自殺に關する法律のお話も致さうと思ひましたが、餘り
長くなりますから「命長ければ恥多し」の言よ従ひ此講談
にも成るべく早く自殺を致させまじやう。

自殺を防止する方策は左の四つを以て重なるものと致し
ます。

- 第一 法律
- 第二 輿論
- 第三 教育
- 第四 宗教

(一) 法律 刑律の如何程嚴なり共自殺の弊害を全く停遏
するの効ありません。然れ共既印度の於て寡婦准死
(スッチー)の減じたる實例あるが如く、幾分か之を減少
するの効はあると相違ありません。

又行政警察は自殺を豫防するに最も緊要なる關係あるも
のです。重なる一二を挙げますれば、

(甲) 癲狂院取締法 癲狂院の取締看獲を嚴よして精神
病者の自殺を豫防す、

(乙) 毒藥劇藥賣買取締法、

(丙) 刀劍、銃砲、彈藥取締法 以上の二箇條は自殺の媒
介物を奪ふ、

(丁) 建築取締法 家屋、橋梁、高臺、塔宇等の建築警察

法を設け、構造法、手摺、欄干窓等に注意して自殺を容易ならしめざる事、

(戌)誘導物取除法 首縊りの松あど、稱ふるものは、一人死ぬると他の人にて自殺の傾きがある者が其樹下を通行すると兎角死にたく成るものと見へまして、巴里府のオテル、デ、ザンバリードの柱にて一人の兵卒が縊死しましたらば、其後十二人迄同じ柱にて首と縊つた者がありました。依て其柱を取除きて後一人も同所にて自殺か無く成つたと申します。故に首縊の松など稱ふ木の枝を切り、身投げの淵の取締を付け、斷食堂を毀つ等の事へ、幾分か自殺の誘導を少くする心理上の効能があります。

(癸)出版物取締法 自殺を奨励する如き書籍を禁止する事等であります。

(二)輿論 輿論と自殺との大なる関係のあるものでして、我邦の如く輿論にて自殺を尊び小説等にて英雄豪傑美人才子などを自殺させる様でハトテも自殺の減ずる事はありません。故に新聞、小説、芝居、狂言等よても頻りに自

殺を擯斥し、痛く之を排斥せざるなりませぬ。

(三)教育 從來我邦よて嘉言善行あど、致し兒童よ誨へる事に随分間違つたのがありませぬ。悲憤慨腹十文字よ搔き切るなどを以て英雄豪傑の所爲とし、夫が死んだ跡で、其遺児を育てんともせずして自害する女を烈女傳の中よ加へる等の事の止め、自殺は卑怯なる行ひじやと云ふ事を教へなければいけません。

(四)宗教 宗教にて自殺を禁戒するは大なる効ある者です。佛教にては自殺を禁止、古代は佛教の信徒は自殺を爲さざりしに前に擧げました晋恭帝の例でも明らかであります。耶蘇教にても古來自殺をしたる者に讀經引導の冥福と授けず、夜中よ埋葬を行ひ、棺を南北向きとする等の教律があります。佛教も殺生戒の本旨に基き説教等にて自殺を擯斥せば成りませぬ。

第十五結論

右に論述いたしました所によれば、自殺は生存競争と正比例をなし、耐忍力と反比例をなし、毫も疑を容れざる事實と思ひます。(喝采)自殺は人類生存競争の戰場より劣者

の逃げ去る間道でありまふ。古來より大業を爲せし大豪傑ハ屢々究するも決して自殺ハいたしません。彼の沛公ハ七十餘戰に敗る、も毫も屈せず、滎陽の圍みに究むるも尙ほ死せず、故に漢室四百餘年の天下を定めたでありませんか。項羽ハ之ハ反し垓下の一戰ハ敗績して其氣を挫き、其膽を冷し、馬に歎し、妾ハ悲しみ、烏江の亭長が一たび難を江東ハ避けて後日の再舉を計るべしと勸むるをも用ひずして自刎したるが故に、百戰百勝の後既ハ手中ハ掌握したる秦の天下を擧げて遂ハ漢の高祖に授けたでありませんか。我邦よても敗績僅カハ七騎を餘し伏木ハ身を潜むるも尙ほ死せず、味方ハ原に敗れ、堺の浦に究するも尙ほ死せざる豪傑が大業を興したでありませんか。今日我邦の如く百事百端改良を計り、社會ハ大變動を生じたる時に當りてハ生存競争も自ら劇烈に成り行きますから、各人能く耐忍の氣象を養成し、一朝の失敗に忽ち英氣を挫き自殺を爲すが如き卑怯の振舞なく、百折不撓、千挫不屈愈ハ進んで生存競争を爲すの元氣あらん事を希望いたしまふ。彼のシエークスペヤの戯曲中

の "…take arms against a sea of troubles." と云ふ詞を守りてこそ始めて人の本分を尽したと云ふ事が出來やうと思ひます(喝采)

○
日蝕の話

明治二十年四月二十三日大學通俗講談會に於て

理科大學教授 寺尾 壽 講談

林 茂 淳 筆記

諸君、只今ハ私の友たちの富井君が御目通りを致しまして利足制限論と云ふ御話をされましたが、富井君ハ私と同じよフランスで學問をした人で有りますが、今晚ハ如何なるマハリアハセカ不思議もフランス人がふたりまで(イヤ、フランス人てハ有りませぬが)一つ所で講談をとするのもこれも何かの因縁で有りませう、此節ハフランスがナンダカ少し勢がよくなつて、ドイツに勝つるもいれんといひますから其の影響で、もありませうかしらん。さて理醫學講談會が大學通俗講談となりて利足制限論あど云ふ我々に適切ある問題を講談することの出來るや

うにありましたの、實に大慶も存じます。私あどの如く大變財産をもてあまして公債證書もつまらぬからチト高利貸でも始めやうと云ふやうな人物にハ利足制限論などは耳を傾けて聽かねばなりません。又一二の學者先生のやうに貧乏にして借り主の地位も立つ人は猶さら耳を傾けて聽かなければなりません。

其との違つて私の演説の題をチト世の中の事との遠い。まかし當年の八月の十九日に日本に日蝕がある筈で、是ハ丁度只今から百年ばかり前に日本で見えた外、今日まで見えたことの無い日蝕がマハリマハツて見ゆるのであるから、世間でも頻りに取沙汰をします、うれで、いつもと違ひ其話をしたらチヨイト面白からうとみんなの勧めに私もその、のかされて今日々蝕のお話をとることになりました。

先づ日蝕との何のことかと云ふことから説明かします。大抵この話しを聞きよお出あさつたお方の御存じでも有りませうがヒヨットすると私の言ふ所の日蝕と諸君の思つて居らる、日蝕との違つて居るかも知れない。よ

つてチヨイト漢學の先生風で日蝕といふ字の字義から説きませう。日と云ふのは太陽のことで蝕と云ふのは虫偏に食の字。是ハ虫を食ふのやら虫が食ふのやら分らんが大陽が虫を食ふと云ふ譯ハ無い。オホカマ虫が大陽を食ふといふことだらう。どんな虫だかしらあいが大陽が何か食われるといふこと、見えませ。現に春秋と云ふ支那のムツカシイ書物の中に「日有レ食レ之」とあつて大陽に何か來て食つたものが有ると云ふことが書いてある。是が今日云ふ日蝕で有りませ。昔は唯日食と書いたものでありませうが日蝕の模様は丁度桃の葉を虫が喰ふのと同じやうなものだから日蝕といふ字にしたのであります。尤も昔ハ食といふ字も蝕といふ字も同じ字であつたのが後世よ至り開化が進んで萬事が煩雜に成るよ從て漢字までが進化して唯食ふのは食、虫の食ふのは蝕と二ツの字になつたのかもしれない。是迄が日蝕の字義の講釋でズット進まない頃の中學校の講義なら最早是でござい。よいが今日ハ中々其れではいかない。さて、この日蝕と云ふ現象ほどのやうなもので有りませ

かと云ふに私もアツマリたんと見たことゝ無い、たゞ書物に書てあることゝ又考へました所によつて見まると大

陽がキラキラとして天の上に光つて居ると。チツトきた

ない喩へたが人間が脱疽をのづらつたやうに端の方にチ

ヨイト黒いイヤナものが出来る、初めよは僅あのが油断

をして居ると段々足に來、臍よ來、股よ來、胴中に來ると死

ぬといふやうに、段々此の黒いものが大陽にかぶさつて

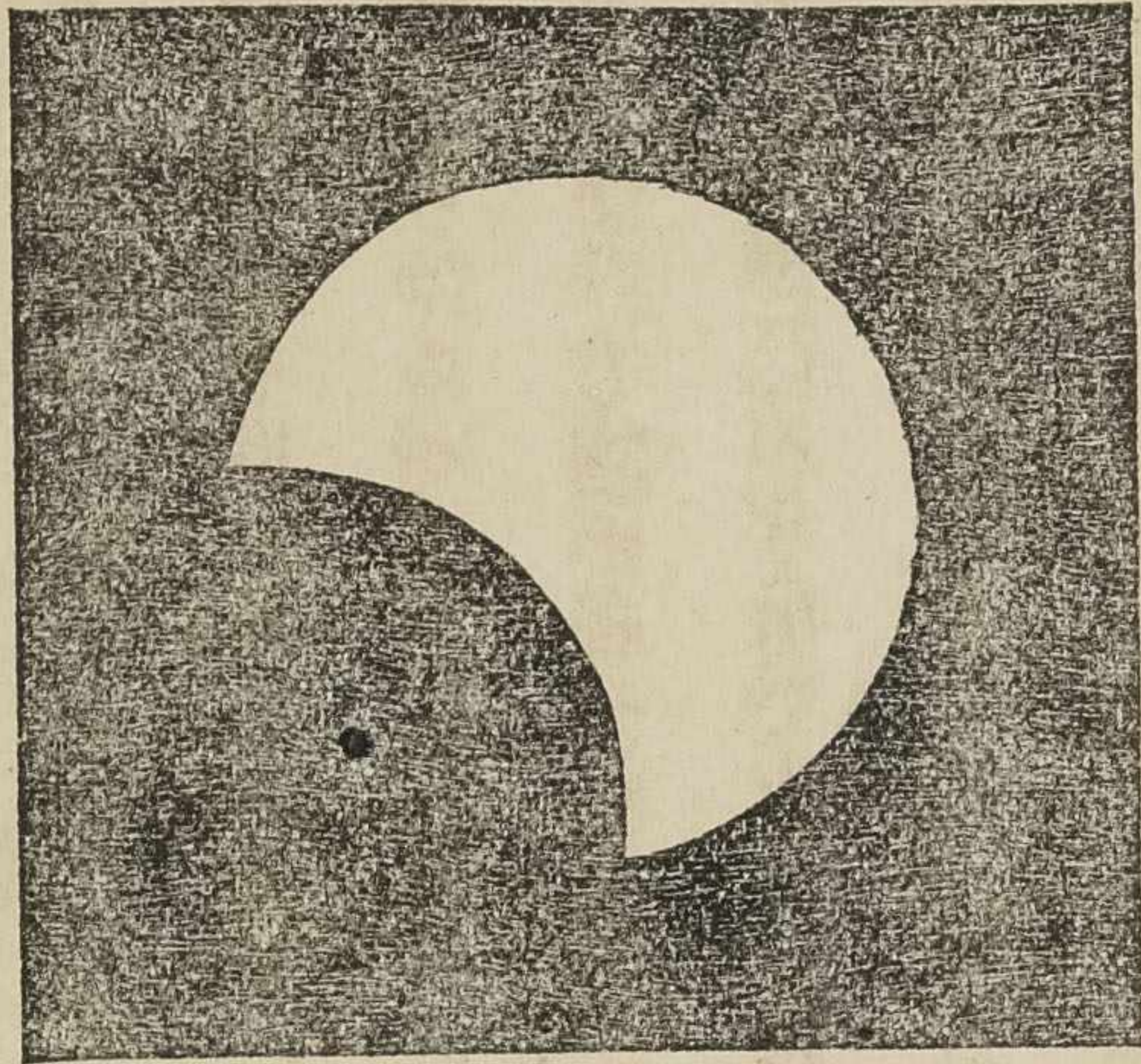
來て今にもクラヤミよあらうかと思ふ位で、時とする

幸にいつのまよやら黒いものが段々に減つてトウト元の

通りよあつてまよいまそ、是ハ申さば輕症の日蝕で、天文

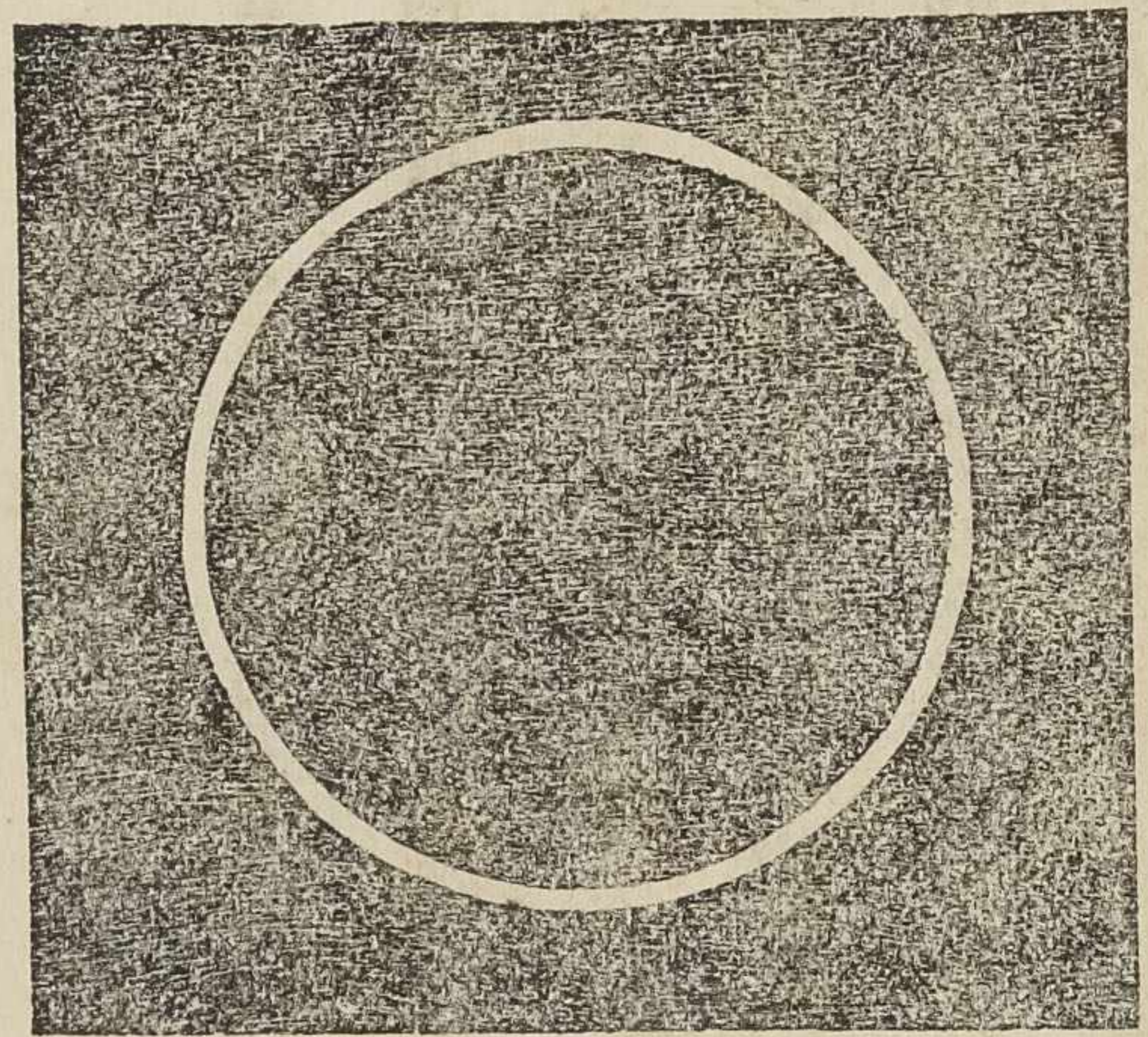
家ハ之を部分蝕と云ひまそ(第一圖)時としますと其の黒

第一圖



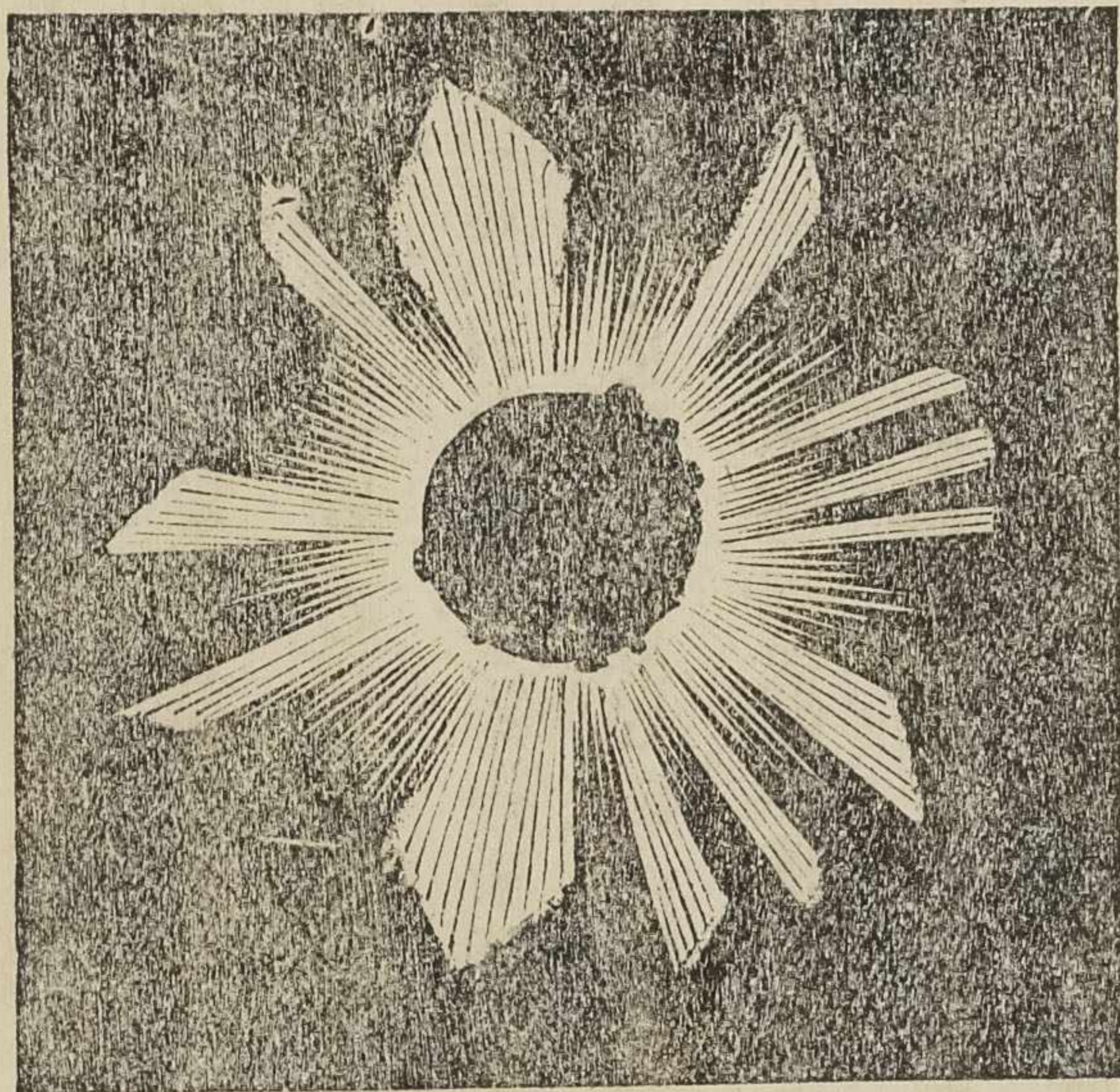
いのが段々段々よ
深くなつて竟にハ
大陽のマンナカの
部分が眞黒くなつ
て僅よ大陽の端の
部分が蛇の目の形
のやうよ残る、是

第二圖



を金環蝕と云ひま
す(第二圖)。金環
といふ金の蛇の目と
云ことでヨホド奇
麗と見えて金の字
をお負けよ付けた
ので有ります。

第三圖



ります(第三圖)。皆既蝕といは彼の黒いものが段々段々に
深くあつて大陽の
全体が残らず眞黒
になつてしまふの
で、丁度蠶が桑
の葉を端から喰つ
ていつて段々に喰
つて喰つてとう々
々マルデ喰つてし
まふと同じやうな塩梅でも、實ハ晝で有りながら夜同様

に暗くあつてしまふ、實に不思議で、何が來てゐるのか
しらないが、晝の間に不意に夜を拵へる、これが日蝕皆
既の有様であります、當年有りませうと云ふのは即此種
類の日蝕でうれで大騒ぎをさるのであります

この通りに不思議の現象で有りませから、昔のヨホド人
の怖がつたものに違ひ無いで、私ども子供の時に聞
いたのをカスカニ覺て居りませが、日蝕の時に外に
出るもので無い、勿體ない、目がつぶれるなどと云ひまし
た。支那人之何か來て大陽を食ふのだと心得て居たとみ
えます、印度人なども黒い龍が大陽を食ふのだと思て居
たといふことです。今日でもアメリカの土人あどの日蝕
及び月蝕の大陽なり月ありが人間に向つて怒ることがあ
つてゐるのだと云つて居るさうですが、日本でも天照大
御神が怒つて天の石窟あま いほに隠れられたと云ふのは恐く日
蝕の事を云つたものであらうと思はれます。また西洋の
方の昔の人ハ色々妙あことを考へたものでギリシヤの
昔の人などは月蝕のあつたときハ魔法つかひが月を袂
の中へ入れてしまふとか、どこよか持つてゆくと云ふや

うよ考へて居りました

千五百六十四年に大變な日蝕がありました。其とき理屈
を知つた天文學者は何月何日ごろに日蝕があると觸れて
居つた。其れあらば恐ろしいとは無い筈で有りますが、人
間と云ふものハドウケタものです、前から知つて居るが
ら矢張こはくてたまらぬと云ふ騒ぎで有りました。其頃
の取沙汰ハ是は屹度諸國に軍が起るの前表であらうと
いふものもあればまた再びノアの時のやうハ大洪水が有
ると云ふものもあり、中ハ地球が焼けてしまふだらう
と云ひ、一番氣に掛けあいといふ人で「ナニ何でもあハ、
大方コレラ病の流行ぐらいで濟むだらう」と云て居りま
した。で有りませから少しハ心得て居る者までが文盲人
の中へまきこまれる位で有りました。中ハ醫者につけ
つけて何か日蝕についての衛生法が千金方ハ傷寒論まで
も書いてハ有るまいかと云ふと、醫者の言ふよハ我々の
考へでハ先づ穴藏に這入つて火を燃して香でも焼いて居
たら少しハ日蝕の害を受ける事が少からうと云ひ、また
坊さんの方でハ、今度の屹度彼の世界の終りに相違ない

と云ふので寺へ懺悔に出るけるものが大層あつたでと。この懺悔と云ふ事ハ新教よハないそうですが舊教の方でハ死ぬ前とか或ハ不斷でも時を極めて坊さんの前で是迄犯した罪を懺悔せねばならぬ、そこで此度の日蝕のときが世界の終りだと思つて居るから皆懺悔に出掛けたのでと、これはウツでも何でも無ひフランスの學者のプサイと云ふ人の書いた書物の中にありますが、其頃毎日毎日懺悔に行く者が多くて坊さんの方ではウルサクて仕方があいと云ふ有様でありました。其れで或る坊さんが一策を按して「日蝕ハ十五日ほど御延引とあつた」と觸れました、固より坊さんの云ふことで有るから誰一人疑ふ者ハなく其れならばと云つて少しユツクリになつたと云ふことでありませ

先づ其の位又昔の人ハ恐れて居りましたもので有りませたが、苟くも天文學を少し知つた者は驚きハしませぬ、中よは自分ばかり知つて居て御神の御使か何かのやうに思ハせて人を欺いた者がありませ。かのキリストツフ、コロンブがジャマイック島に於て土人に圍まれたとき前

以て月蝕のあることを知てゐたので土人に向つて「これに兵糧を呉れないと月を取つてしまふぞ」と云つた。初めハ信じあかつたが段々月が眞ツ黒よあるものだから大に驚き、これハ大方御神を、かたであらうと云つて、兵糧を澤山に持つて來たと云ふことです。これハ千五百四年の三月一日でありました。其外昔のイクサの時に、日蝕によつて或ハ味方を勵ま玄或ハ敵に氣を落させて勝利を得た人おども随分有りました

さて日蝕ハどうして起るものであらう。これハ多分諸君の御存じのことと思ひます。けれども今日々蝕に付て色々のお話をするよは先づ日蝕の起る原因をお話しをするハ順序であります。私の國に日蝕によく合ふ例がありません。其れハ寶滿く、く、くかくしと云ふもので有ります。其れは日蝕よりハ幾分か分り易いあら其から説明しませう。私の國に寶滿山と云ふ山が有ります。餘り高い山でもありませんが筑前は山が少ない國で有りますから鳥さき郷の蝠蝠と同一く山さき國の寶滿で、誰も星の親玉は日、山の親玉ハ寶滿山と心得て居る位で有りますが、其れで彼の有名

の太宰府の近所にあるので天満宮へ參詣するものが皆往來よ之を眺めます。其道端に小山と云ふ程でもない地瘡が有ります。尤も東京では飛鳥山さへ山の内に入れて有りますから其れも山と云つてよいで有りませう。さて此地瘡の側へ行くと寶滿が見えなくなり少し行くと又た見ゆるやうよあるです。其れで之を寶滿かくしと云ふのです。此の寶滿かくしの現象ハ丁度日蝕とよく似て居ります。先づ太陽が寶滿で寶滿かくしが月で有ります。太陽ハ非常に大ききものでサシツタシだけでハツても地球の百倍餘もありませす、立積でいふと百倍の千倍即ち百萬倍の餘よあります。月ハ之よ比べると非常に小さな物で其の直徑が地球の直徑の十一分の三ばかり外ありません。だから地球と一寸の球としますと月は唯二分七厘ばかりの球で太陽ハ一丈あまりの球にあたります。倍距離ハといふと先づ地球から太陽までの距離ハザットした調べで地球の半徑の二萬三千三百倍ばかり、うれで地球の半徑をザット千六百里としましても三千七百萬里餘といふ夥しい距離で、月までの距離ハ地球の半徑の僅六十倍、ま

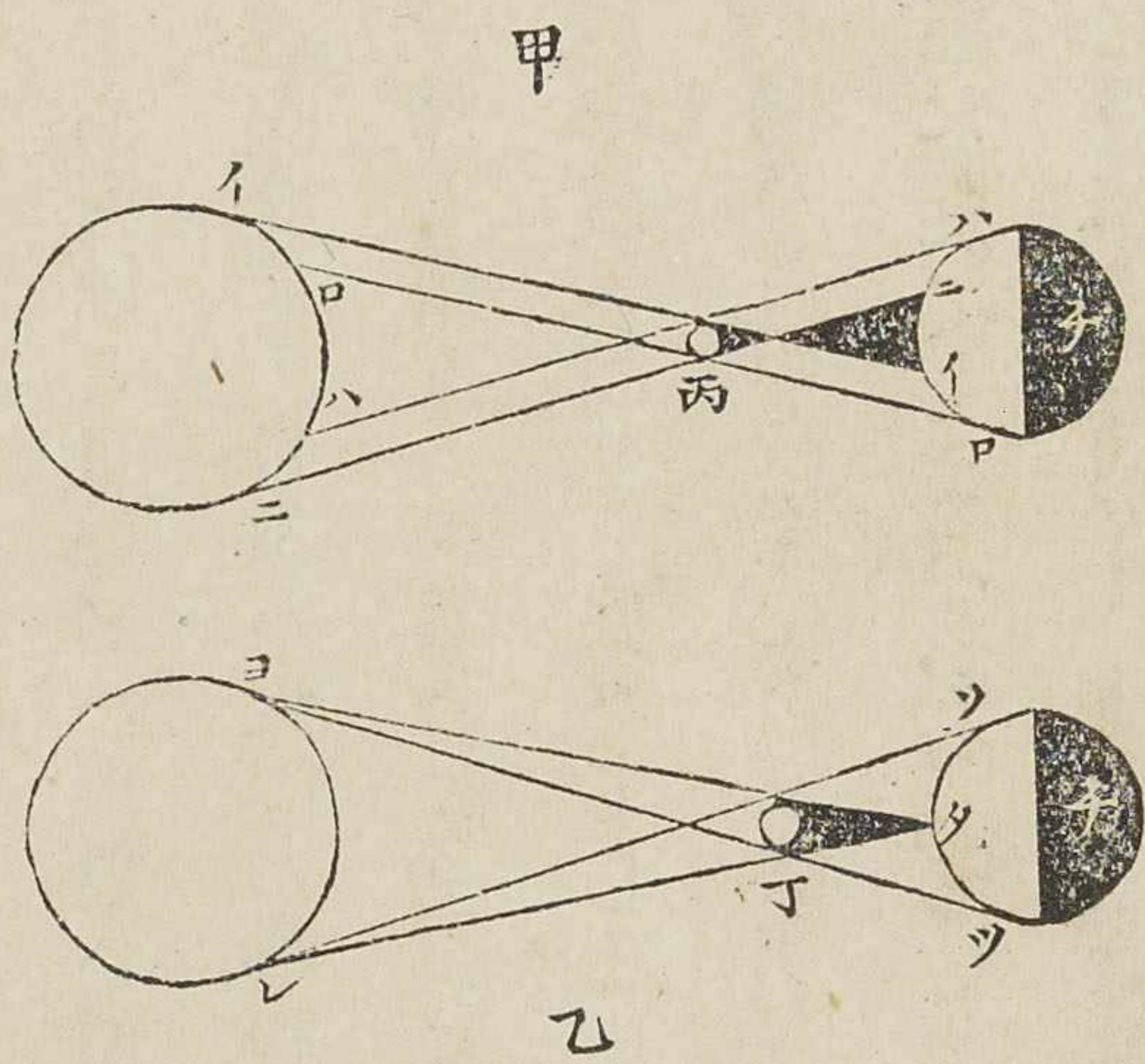
づザット九萬六千里ばかりで有りますから、チヨット見た所でハ月も太陽も同じ位の大ききよ見えますが實は今いつた通り月ハ太陽よりも非常よ小さい物であります。此小さい物が大きい太陽の前に來ることがあると寶滿かくしが寶滿の前に立ち塞がツたやうに太陽が見えなくある。其れが日蝕殊に皆既日蝕の有様で有ります。其れだけのとハ御存じで有りませうが色々疑ひが起て來るです。月が太陽を隠すことが出来る爲にハ殆んど地球と月と我々と一直線にならなければならあいが、さういふことが出来るかと云ふ疑ひがあります。其れハ出来るのです。太陽のマハリに地球が回つて居るので有ります。其れハどういふ證據があるかと云ふことはチヨットお話し申すことハ出来ませぬ。其の地球のマハリを月が回る。うここでマハリアハせよツてハ太陽と地球とのあいだよ月がはさまることが有ります。まかしはさまる度に一直線にありハしあひ。月の運動して居る道と地球の運動して居る道とが同じ平面上にはあひ、言ハば此の紙の中に地球が回つて居るとするに幾らかハスカケに

あつた紙の上より月が回って居るです。それだからして地球と太陽との間に月が来るとイツでも太陽を隠すと云ふ譯よいかない。二ツの平面の截り合つて居る處に来てはさまつたときだけ日蝕が起ります。

また太陽と地球との間に月が這入つても太陽の一部分だけしか隠さぬことが有ります。其れが部分蝕の場合で有ります。時とするとマルデ隠すときが有ります。其れが皆既蝕の場合です。又地球の軌道も月の軌道も楕圓と申して少しイビツになつた圓のやうなものでありましから、太陽と地球との間に月が這入つた時距離の遠いこともあり近いこともあるが。遠いときにハ真中の部分だけしか隠しおぼせぬことがある。これが金環蝕の場合であります。これを成るたけ分り易いやうに圖を以て説き明しませう。

こゝにかいてあります此の大きいのが太陽で(第四圖)、真ん中に小さいのがあるこれが月で、コツチノ半分黒く半分白いのが地球です。此の始めの圖が金環蝕の場合であります。此場合でハ月と地球の間の距離が遠すぎるの

第四圖



で太陽のら月が照されて居るときに出来る影の中に我々が這入ることが出来ふです。こゝに(イとニの間)に観測者が居ると

すると太陽の真中の部分だけハ月から隠されて居ります。が端の方ハ見ゆるです。乙の圖の方がこれが皆既日蝕の時、の有様で有ります。これは月が地球より近いものだから表面のヲと云ふ所ハ観測者が居ると見ますと月の端をかけて線をひくと太陽の外に出てしまふのでマルデ太陽が月から隠されてしまふ。これが皆既蝕の有様で有ります

この皆既蝕にある時と雖も金環蝕にある時と雖も始め終りよハ必ず部分蝕にあるもので有ります。月も太陽も動いて居ますが申さば太陽も地球もザットして居つて月だけが動くやうなもので其の月の影が地球の表面に止ま

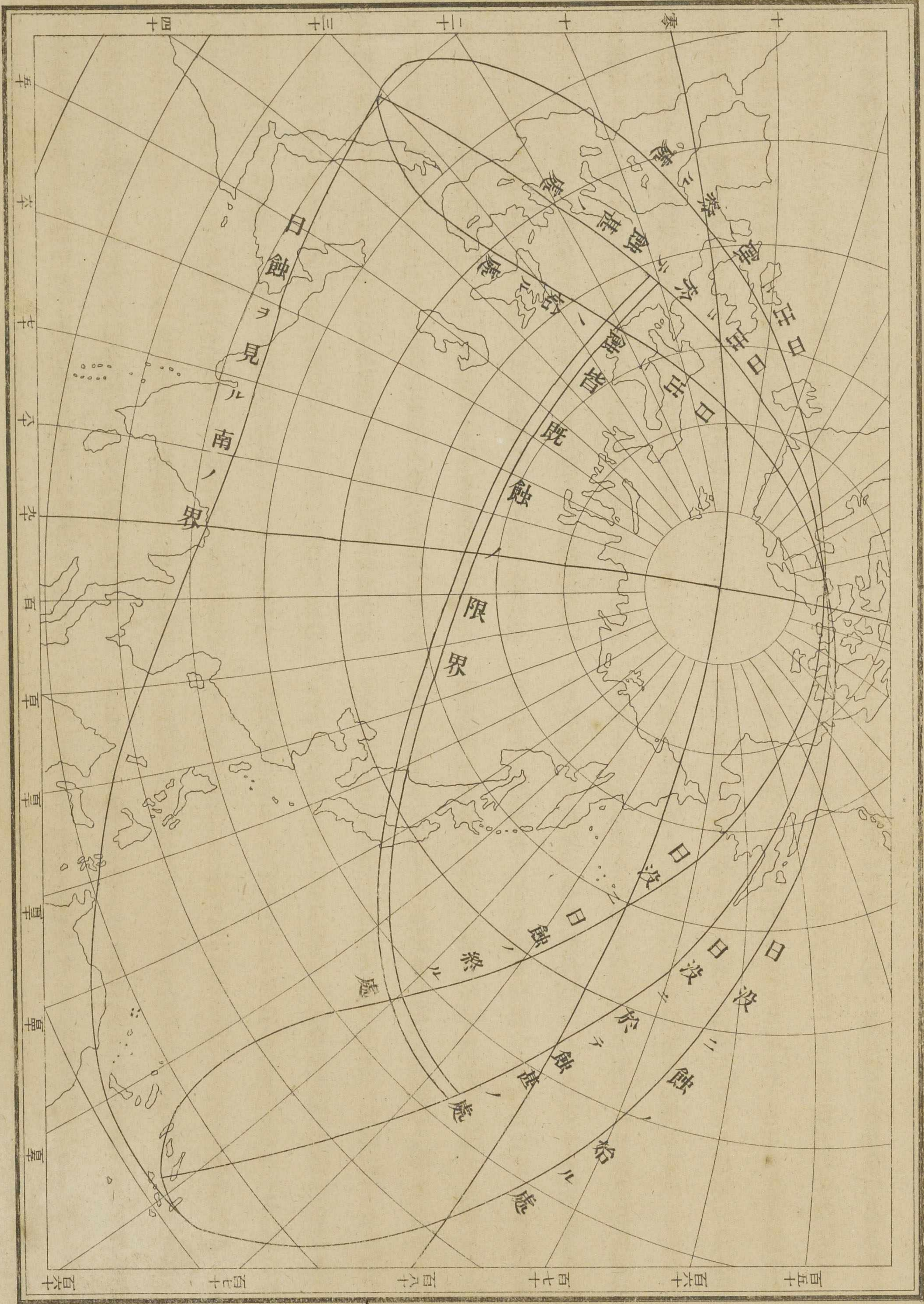
ツて居るものではない。丁度晴天の日に窓の外を鳥が飛ぶとすると其鳥の影が窓の障子にうつる此鳥の影が絶えず障子の上をあるくと同様に月の影が地球の表面の上をあるくです。うここで此影が丁度我々の居る所に來れば皆既日蝕を起すが其の前少し後は部分蝕になる。此圖で々と云ふ所より外の所から太陽を見ますと一部分の月の爲めに隠されても他の一部分が見えます、だからつひ脇の方よの皆既蝕があつてもヶ様な所で未だ皆既にならぬといふか或の既に濟んで今の部分蝕にあつて居るです。今度の金環蝕でも無く皆既日蝕でも無く始めから終りまで部分蝕の場合が有ります。其れの大陽と月を結び付ける直線と月と我々を結び付ける直線とが卒法になつて居る時です。其の時分よの月の影が我々の所に來ることが出來ない、だから大陽の一部分は隠されますが、他の部分の隠されることが出來ませぬ、此のやうに分つて見れば日蝕も決して怪しむよ足らぬもので有ります

此の日蝕の話を話してと序でよ月蝕のことを話

しなくてはなりません。これも同じやうなもので、満月の時に限つて有るとです。これは黒いものが來て月を食ふやうに見えて其れぎりではまふとも有り、またマルデ無くあることも有る、即ち月蝕も部分蝕や皆既蝕がある、金環蝕はありません、皆月蝕はドンナものかと云ふに極簡単なもので先づ月の地球と同じやうに大陽から照されて光つて居るものです、又月の後よ影が出來ると同じやうに地球の後よにも影がある、皆此影の中に月が少しでも這入り込むと、一部分だけなりと大陽から照らされること出來なくなる、もし全く這入るとまへば全く光を失つてしまふ、其れが月蝕と云ふので有ります。でありますから月蝕と日蝕との現象の似て居ります其原因の全く違ひます。日蝕は大陽が唯觀測者の爲めに見えなくなる、たゞ或る人の爲めに見えなくなるだけ、月蝕の方の月が本當に光りを失つてしまふ。光りを金に譬へて見ると大陽の月の金主であります、其金主からの仕送りの道を絶たれてしまふからいけなくあるのです。さうしますと月蝕と日蝕との地球全體に付て言ふと月蝕より

日九十月八年世治明

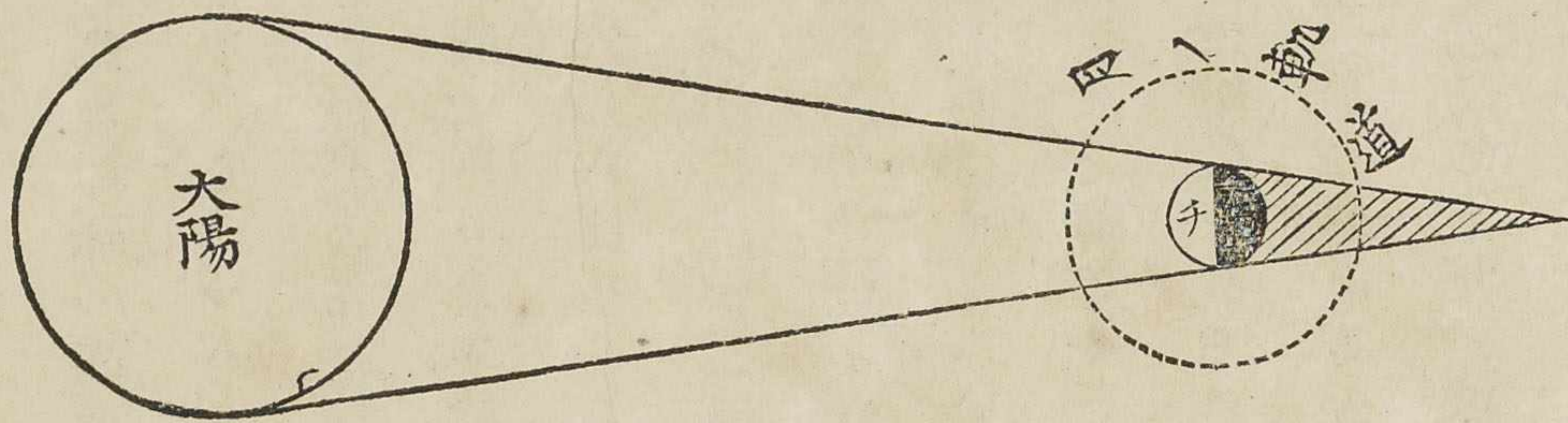
圖ノ界限ル見ヲ蝕日六第



日蝕が多
いのです。
其の故を
い話とし
ることが
出来ませ

方に分り
ますが日
本での月
蝕より日
蝕が少な
い。其れ

第五圖



日蝕が多いです。其の故をお話とすることが出来ませう。今此の圖(第五圖)をかりて説き明しよとす地球と太陽

の方に這入るよりも多い、即ち月蝕より日蝕が多くあければならない、然るも曆を前から心がけて御覽よなつた

とを包み廻りして居る蟬取り袋のやうな錐のやうな形をしたもの、左側の部分に月が這入り込むと日蝕が有るです。さうすると太陽の一部分だけなりと是非月から隠されるから地球の表面のごとで必ず日蝕がある、又此の右の部分に月が這入ると是非月蝕が起る、然るに御覽の通り此の錐形の物の左の方即ち太陽と地球との間に在る處は太くて右の方へ細い、だからして月が左の方に這入ることが右

方へ分りますが日本で月蝕より日蝕が少い。其れをドンナ譯で有りませうと云ふと月蝕もある度よ世界の半分から同時に見ゆるけれども、日蝕は同時に世界のどこから見ゆるもので無くどこにか有つても日本から見えないことがあるです。日本から見えないと云つての本當で無い日本人の爲めには日蝕がないのです。また日蝕の中でも部分蝕の割合は澤山ありますが金環蝕又ハ皆既蝕ハ少いのです。今度地理局の人に調べて貰ひましたよ今から一番近い日蝕のあつたのが天明六年(即チ西曆千七百八十六年)の正月朔日で丁度今から百一年前です。其の後千八百五十二年即ち嘉永五年の十一月一日に京都で九分九厘五毛の日蝕が見えました。金環蝕ハ天保年中よ一度ありましたさうです、其後明治十六年の十月卅一日で有りましたが不幸にして大抵の所に見えなかつたです。有つて見えなかつたと云ふのハなぜかと云ふと曇つたり雨がふつたりしたからで有りませう。其次が當年の八月十九日の皆既蝕でありまして已に世間でも取沙汰をします、天文学などを専門にして居るものハ其のことよ付て

ダ完全ナル結果ヲ得ルニ至ラザリシガ今日迄荏苒打過ギ
ニケリ、然ルニ那氏ハ其不規律ノ原因ヲ見出シ地皮ニ痛



ミ所、ロ、ア、リ、テ、磁、力、ノ、發、顯、ヲ、不、正、ト、ナ、ラ、シ、ム、ル、ニ、ア、リ、ト
（尙ホ磁力横向線ノ解釋ハ本誌五十三号地文學講義ヲ參
考ノルヘシ）

六年前同氏地質局ニ有シトキ本邦ノ地形并ニ地盤調査ヲ
始メシ際磁力觀測ヲモ合セテ心ニ留メ其ノ火山ト如何ナ
ル關係有ヤト玆ニ注目シ助手關野修藏氏ヲメ全國所々ヲ
觀測セシメリ其方法ハウヰルト氏ノ仕方ニ賴リシ者ナリ
斯クテ磁石ノ横向并ニ下向等ヲ測リ地圖上ニ同横向
(Isogones)ノ所ヲ連續シ一線ヲ畫セシニ意外ニ面白キ
結果ニ露レニケリ并ハ下文ニ述ベ申サン
全體本邦ハ弓狀ヲ爲セル國ナリ、同横向線モ大略國ノ形
像ノ如ク彎曲シ國形ト平行ス、特ニ西横向五度線ヲ檢ス
ルニ因州ノ大山近傍ニ起リ山陰道ノ北岸ニ沿ヒ走リ若狹
灣ヲ横切り越前、越中ヲ經テ忽然能登ノ南ニ及ンデ北ニ
折レ日本海ニ入り再ビ南行シ佐渡島ヲ經テ新潟ヲ中央ト
シ圓圈ヲ畫シ又再ビ本邦ノ地形ノ如ク東北ニ走レリ
却說線ノ不規則ト云ハ前記ノ如ク北越ノ彎曲ニテ之レニ
ハ理由アリ那氏ノ自說ニ據レハ越後高田近邊ヨリ信濃、

甲斐、駿河、伊豆ヲ包括スル地學上大溝アリ、之ヲ學問上 Fossa magna ト名稱ヲ下セリ、此ノ大溝ハ地學上、太古元 (Palaeozoic era) ノ頃ニ出來本邦ニ大横割ヲ生シ他ノ山モ關キ留メラレ西側ニテハ飛驒、美濃ノ山ノ如ク東北ニ折レ大溝ノ東ニハ秩父諸山ノ如ク前ト全ク反對シ東南ニ彎曲セリ、其大溝ニハ本邦有名ノ北越燒山、信濃ニアリテハ白根、淺間、南ハ富士并ニ伊豆ノ火山アリ、延ビテ伊豆七島ニ及ブ、即チ大火山脈アリ、斯ク地体ノ構造秩序ヲ亂セシニ據リ大溝ノアル所ヲ避ケ同横向線ハ北ニ彎リ地磁力ニ大ナル影響ヲ及ボセシコト判然タルガ如シ

此ノ Fossa magna ニ就キテハ澳國ノ博士ズース (Suess) 氏ハ異議ヲ起シ、本邦ノ學者モ持論アルベシ、然レドモ未ダ地体構造ヲ細カニ檢セザレハ皆架空ノ論タルヲ免レザレバ本邦地學者ノ功名ヲ成ス可キハ此ノ大溝ノ有無ヲ穿鑿スルニアルガ如シ、若シ此點分明トナルニ至レハ關東ノ地震現像ヲ解説スルニ一大基礎ヲ與フルコトナルベシ

(圖ヲ參觀アレヨ)

灰ニ聞ク帝國大學ニハ教師ノツト君又田中館愛橘君等不

日本邦ノ磁力觀測ヲ始メントノ企圖アル由、少シク此邊ニモ注意アリテ然ルベシ、又水路局ノ測量技師モ此點ニ留意シ相頼リ相助ケ幾多ノ觀測ヲ施シ結果ヲ得レバ亞細亞東部ノ同横向線異様ノ彎曲ナル理由モ判然シ、又七十年來問題トナリタル地磁力ト地形ノ關係モ明瞭トナルニ至レバ其時コソハハンボルト死期ニ際シ言ヒ遺セシ言辭即チ予ハ今將ニ化石トナラントス若シ地磁力顯像ニ關セル雲霧ヲ排ヒ白白快晴トナラシムル人アルアレバ予死ストモ予ノ心臓ハ其人ニ向テ脈ヲ動シ温意ヲ表スヘシト、今ハ故人ノ有名ナル大博士ハンボルト先生ノ恩愛ヲ享クルノ榮ヲ獲ル學士コソ羨ム可キ人ゾカシ

○ 藥物ノ效能 醫科大學教授 高橋順太郎講演
伊藤新太郎筆記

二十年四月九日 大學通俗講談會に於て

私か今日御話し申ますることハ藥物の功能即ち藥のききめと云ふこと、ト申すと藥賣が往還で藥の效能を説て勸る様にも聞かませうが、實ハサウ云ふ積りでハ御坐りませぬ、

せぬ、藥と云ふ物はドレ程の効驗でドレ程は恐ろしいか害

な模様で即ち苦んた時に何を嘗て効があつたと云ふ事が

せぬ、薬と云ふ物はドレ程の効験でドレ程よ恐ろしい害
 が起るか、其事を一寸申しまして、之に序て薬の効験を見
 るに、私が一々薬を飲で御目に掛たいが、中に驚く
 様な事があるかも知れませぬし、夫は第一健康を害し、又
 身體が續くものでありませぬから、是を動物よ就て簡
 易に實驗をして御覽に入れます、偕薬の効験即ち薬のき
 くと云ふことを知りたのハ餘程古い事で、漢土の黄帝神
 農氏は農學よ骨を折られたから神農の名もあります、其
 神農氏ハ百草を嘗て醫薬ありと云て、ドンナ所へきくか
 と試^{タメ}すには自ら嘗たものと見ゆる、是ハ今日にして考る
 と中々迂遠でありませう、ケレハ後よ生れた者の仕合せ
 で、先人が薬の効験を知ら上でのあるが、尙此薬の効験
 の未だ十分ならぬ所を穿鑿して、サウシテ治く發見する
 のが當時に生れた人の務めで有ります、偕薬と云ふ物の
 ドレ程にきくか、其事を穿鑿するに色々の方法が御坐
 ります、即ち之を人間よ試^{タメ}した事もあり、或は動物よ薬を
 用いて見た事もある、例之ば動物がヒドク惱む病氣の場
 合よ草を嘗て効があつたと云ふ事もあり、人間よ同様

な模様で即ち苦んた時に何を嘗て効があつたと云ふ事が
 ある、此様にして追々と薬を發見した事も御坐ります、
 今一寸極アライ例を擧て見ますれハ、犬の腹が痛む時に
 吐く、吐くとハッキリして心持が善くある、夫に蕈の様
 な物を食べると、チカチカして苦ッぱしい心持がするか
 ら、之か爲に吐いて、心持が善くなる、人間も元ハサウ云
 ふ事をヤツたのであります、併し是ハ最もアライ物で追
 々と薬を用る様になりました、併し薬と申しましても以
 前ハ極アライ物を用ひて居ります、夫ハ則ち草根木皮の
 類を或ハ煎薬よして用ひたり、或ハ其儘で用ひたことも
 御坐ります、總て草根でも木皮でも、煎薬にするか又は其
 儘刻んで飲むものハ、是非とも量を多く用ひなければな
 らぬ、ナゼと申すに其有の儘では如何よ功能が有つても
 多くの量を含んで居りませぬ、又多く含んで居る時ハ甚
 く量^リが過^リきて中^毒をする、中^毒と申すハ強い毒に中^つて
 病の他の苦みを起す様お鹽梅にある事て御坐ります、併
 し醫者の最も大事の職務と申しまするのハ、或る病よ向
 つては成^る可^く早^く成^る可^く苦^み無^しに治^すが務^めで、

又成る可く能くきく薬を用いるが醫者の務であります、
 而して以前から用いて居る薬でも、其ききめの確然分ら
 ぬ物も有り、又ドウ云ふ性質であると云ふことも分ら
 ぬ物が有るから、之を委しく調べて知らなければなりま
 せぬ、然るに此事を調へるの、申さば随分新しい事で御
 坐りまして、多くは今より八九十年前から此學問が開け、
 第一醫學の進歩又ハ化學の進歩で進んで來ました、其一
 二の例を取り動物に就て試験を致さうと思ひます、尤私
 が今日申上る事ハ、後ハ動物に就て御目に掛まするが、
 先摘んで申しますれば、以前ハ療治をするハ痛む所ハ切
 斷して 痛む場所を截て取つて仕舞ふ、譬へば傷を受けて
 其所を切斷せぬハ、段々段々傷が重つて腐り、終りに療
 治も及ハぬ様なことになるが、其場合に切つて去つたら
 早く癒ると云ふので、之を切るハ小刀或ハ鋸を用いた
 と云ふ、實ハ聞いてもズツとして其痛みを恐れ、又血が出
 れハ可恐コイと云ふ感覺が有るから誰も治療を致しませぬ、
 古昔の亞刺比亞人の血の出るとを恐ると云つて烙鉄で焼
 く、焼けハ血が出ずハ黒焦に成て取れると云います、或ハ

又戰場に出て傷を受け手足などハ傷を被ることが有る、
 其時に早く切つて仕舞へば全身ハ害が及ばずして直る
 ハ、其痛みに耐ぬ所から傷の療治を爲す、終ハ之ハ爲に歿
 した者も有ります、僭斯シカリ云ふ傷の療治を爲すのハ外科
 術で、其傷の場所を切つて去るに、痛みなくして療治を仕
 横と云ふ考へを起したのハ、随分新しい事で餘り古い事
 での御坐りませぬ、又夫が爲に用ひた薬も種々御坐りま
 すが、其最も初めて用ひました物ハ亞酸化窒素と申しま
 す、デ是は有名なる英國人デデビビー氏が初めて發明して
 用ひました、此亞酸化窒素ハ瓦斯體ですから呼吸の運動
 で吸込みます、サウスルト一種奇妙な感覺を起して、嬉し
 い悦ばしい心持よなる、故に之を笑瓦斯とも云ふし、或ハ
 嬉しくなるから歡喜瓦斯とも云ふ、之を飲めハ精神がポ
 ンヤリして來るから、其精神昏茫の中に療治をして仕舞
 ふので、始めハ此瓦斯を吸ハして療治を致しました、併し
 此瓦斯ハ餘程危險ある性質が御坐ります、故に永く飲ん
 で居れば此瓦斯の毒に中つて死する様なことが御坐りま
 す、又其後に尙ほ害の無い物質を發見しましたが、是も

は當時での用ひませぬ、所謂後よ発見しました物のエーテルでは最も一の流動體の揮發物、即ち香のする物でタツテ行く物、之を發見して治療に用ひました、併し是よりもマダ害の無い重寶な物質を見出しました、是の皆様も御聞で御坐りませうがコロ、ホルムと云ふ物で、千八百三十一年に獨逸國のリービヒと云ふ有名の學者が發明致しました、其後千八百四十七年に至りまして、蘇格蘭エヂンボルクの産科醫者のシンプソン氏が、初めて此藥を用ひて治療を致しました、先づ其手術を施す前よ此藥を嗅がして、精神昏茫即ちボンヤリして痛みを感せぬ時に治療をすると、小刀で截るとも鋸で引くとも少しも感覺が無くして、恰も死人を療治する通りで、外科の手術を爲す醫者よ於ても、少しも心を騒すことが無く、落付いて療治をすることが出來、又治療を受ける人も覺へが無く、目が醒れば兼で痛んで居つた場所が切去られて、爲よ全治することが出來ると云ふ、是の實にリービヒと云ふ人がコロールホルムを發明し、又シンプソンと云ふ人が醫道よ用ひた所から生ずる賜であります、此コロ、ホルム

は無色透明の水の様な流動體で御坐りまして、サウシテ常に揮發して香ひます、其香ひの奇妙な甘い様な香ひで御坐ります、夫で此藥の通常の温度よ常に蒸發して行く物で、之を吸へば呼吸の機能に依て吸込むことが出來ます、之を吸へば呼吸毎に肺臟よ這入つて、肺臟の表面の廣い所から吸収されて血液よ這入る、血液に交つてコロ、ホルム固有の働きを爲します、テ諸君よコロ、ホルムを御目に掛けます、是の遠い所から見れの水と變つたよとの御座りませぬ、一々御目に掛け度いが、到底毒な物で危ないから嗅くことを出來ませぬ、夫で此コロ、ホルムの水よりの重く、仮に水の重さを一と立てるとコロホルムは一倍半重く、且油の如きもので水とは交りませぬ、之を水の中へ注げば下の方へ沈んで行て仕舞ふが、水も無色此も無色で其境が分らぬ、ドウシテ見るかと云へば沃度と云ふ藥を加へる、サウスルト之が溶けて赤くありますから、キツパリ境の立つた水にして分けることが出來ます、(試験)此通りコロ、ホルムは重い物で、下の方へ沈んで色が附きました、亞酸化窒素の瓦斯體で、

瓦斯体を貯へるに一の装置が入ります、エーテルも空
 氣も遇へり立つて仕舞ふから一の容器イレメンが入ります、且亞
 酸化窒素の前に云た通り危険なる性質が有り、コロ、ホ
 ルムハ揮發物で常に立つて行きます、夫故に譬へば海
 綿の如き物にシメシテ保てば、自然に呼吸氣道に這入て
 コロホルムの働きを爲します、併し此コロ、ホルムばか
 りと用いては、生命を保つよ必要ある空氣の呼吸が窒塞
 致します、故に十分空氣の酸素を交せてコロ、ホルム
 を吸入する、此法に依て當時ハ外科手術を施します、デ
 此コロ、ホルムを用いますれば、初めハ精神昏茫して夢
 の如く、時として分らぬ事を云つたり、或ハ常に思ふ嚙
 語を云ふ、是ハ腦の作用が變つて、常に云てあらぬと
 云ふ意で押へて居るが、其力が無くなつて分らぬが言を
 云ひ出すので、是ハ恰も熱に浮される時と同じで御坐り
 ます、其後ハ物の順序を乱すと云つて、譬へハ數の初め
 から一二三四と算へさせて見ると、大變に順序を乱して
 一から七よなつたり、四から八に飛たりして區別する力
 が無くあります、其後に知覺即ち痛みを忘れる、例之ハ

常にハ指の先其他の皮膚を捻ツネるの切るかすれば、必ず痛
 いと云ふ感じが有るけれども、此感じを覺へぬ様になり
 まし、又反射的の運動と申しまして、眼の角膜(眼の球)
 を按サスれば必ず瞬マタきをしまさるが、此感じも無くなつて全
 く眠つた様にありますから、此時に刀を下します、併ながら
 を爲すので、醫者ならハ此時に刀を下します、併ながら
 元是ハ揮發物で御坐りますから、既ハ血に交つて永く
 なる立つて行つて目の醒めた如くなる、是ハコロ、
 ルホルムを用ふる所の原因で御坐ります、尙ほ是ハ後に
 動物に就て實驗して御目ハ掛ける積りで有ります、夫か
 ら今一ツ天然に有る物で化學的の術に依て拵へた物が有
 る、是ハ眠らから爲に用いる藥でコロラルヒドレートと
 申します、サウシテ此藥もリービヒと云ふ人が千八百三
 十二年に發明致しました、併し此品物は未醫術上ハ用
 いませんで其後千八百六十九年になつて、初めて醫者
 が此藥の効能の有ることを發明致しまして、其以來醫術
 上に缺可らざるの藥となりました、此藥も矢張腦の作用
 を押へまして、麻醉致しまするので眠りを催します、此

事を申しますると、生理學と云て人間の生きて居る道理に涉りまして、餘り長くありますから略します、で或病氣に依て容易に寐就く事の出來ない病が有つて、之が爲に身體の衰弱することがあります、其場合に用ひて屢々功の有る物で、是も後に動物に就て御目に掛けます、此藥の功能は夫程に恐ろしい物である、夫で今日私の御話し申す目的は藥のきくのを以て最も貴い物、藥のきかぬのへ全く役に立たぬ物とする、譬へ急病の患者が有つて藥を用ひる時に、其藥が夫程にきく物で無くて時を移したと見ると、早く功能の有る藥を用ひたら直るのに、きかぬ藥を用ひて治療を怠つて、後よ初めて効能のある藥を用ひても、最早救ふ可らざるに至ることがあります、或へ又以前からして何處ドコもサウで御坐りますが、早く藥のきくのを用ひれば直るのを、神様佛様に任せて置いて、ナニ神様のことだから神様を念して居れば、別よ藥へ用ひずとも病が直ると云ふ様なことを云て居る、又坊主神主なども神様佛様を常に信じて居れば、決して藥は入らぬと云ふ事を何處ドコでも申します、之が爲よ療治を怠つて

到底不治の性に陥り、或へ救ふ可らざるに至つて終よ死ぬことも御坐ります、此等の場合よ早く名醫の所よ就て病にきく藥を用ひたならば効の有ることよ御坐ります、殊に近頃、西洋家の醫者が流行つて、西洋醫者の恐ろしいきく藥を用ひます、中には西洋流は危ないことをすると云ふ者もある、是は成程危いことも有りませう、が其用ひ方に依て藥にも爲り毒にも爲る物で、其藥を用ひる人即ち病人が早くきかぬと云ふ所から、無暗にタント飲め、善いと思つて、猥にガブガブ飲んで爲に毒に中つたことも御坐ります、嘗に毒に中るばかりでは御坐りませぬ、時として功の有る藥を使ふて自殺したり或は人を殺す爲に用ひたこともあつて、是は既に以前から日本にも例の有ることで御坐ります、實よ恐ろしいもので、刃で人を殺せ、忽ち顯れるから、卑怯千萬にも人に見えぬ様よして藥で殺す、是は極ケンノンな仕方御坐ります、故に藥のききめを見又毒のききめを研究するが一の學問で、畢竟毒と藥との僅の違ひ、即ち其用ひ方の如何に依て藥も毒に爲り、又毒も藥と爲ることが御坐ります、

此事を研究する學問を藥物學と申します、此藥物學を實際に應用して、^{キキ}効能の有る藥を藥として病人に與へて直すが一の學問、又一の藥の効能を研究して、併せて毒の方にもドレ丈に働かど云ふことを研究する、之を研究するに人の身體に試ることの固より忍びぬことで、或は毒に中つて死ぬことが有りませう、人の性命を學術の爲に投出と云ふことの出来ませぬ、私に向てせよと云ても夫の出来ませぬ、夫故に之を動物に就て試みる、尤も動物にしる之を殺すは慘酷と云ふ人も御坐りませうが、併し動物に就て試験を爲しまして、サウシテ學問上は幾分が進歩が有り、進歩が有つたら同じ兄弟の人の病に効能が有ると云ふことが分りませう、果して効能が有ると云ふことを見出した上で、病人に用ひて効能が有つたららば、初めて人を救ふの術と爲りませう、畢竟醫は仁術なりと申しますから、動物を一や二殺しても敢て殘刻で無いと思ひます、加之動物に毒をヤツテ、ドンナ鹽梅に苦み、或はドンナ鹽梅に倒れるか、又之に依て毒に中つた人のドウ云ふ鹽梅に爲つて居るかど、動物の試験に依

つて藥の働きを見たら療治とる手段にも爲りませう、且動物以外の藥を與へて既の中つたものを直す事を試るゝとも出来ませう、尙一步進めて動物に毒をヤツテ、ドウ云ふ工合になつて働かど、或は死だ上は解剖して、ドウ云ふ所に毒が有るの、再ひ其毒を見出すことが出来るか出来ぬかも研究することが出来ませう、デ或毒物の解剖して再ひ見出すことが出来ませう、斯うして見ると人を毒害すれば發覺せぬが、亦で殺せぬ發見すると思つて居た者も是から後の藥で毒害するよとが出来ぬと爲りませう、學問が進んで來ると死だのを解剖して毒を見出すことが出来るから、是は何の毒を用ひて殺したと發見致します、又毒害した者を隠して葬つて仕舞つても、後で裁判が纏れると葬つたのを掘出して、サウシテ毒の有無を穿鑿すると云ふことも、出来ませう夫故既に一旦の毒害しないと極つて葬つても、後に之を掘出して試験をすると、愈々毒に中つて死だに相違ないと云ふことが知れます、此等の藥物學の大體で御座りまして、藥の性質の勿論研究する、又藥の僅の量を用いますれば、或は病人に効能があ

り、若し程度の量を超ると之が爲に命に係つて死ぬること

て與へます是を與へるに色々方法が有りませうが、之

り、若し程度の量を超ると之が爲に命に係つて死ぬること
とがあり、良し死ぬに至らぬでも不治の症に陥つて、一
生直らぬ様もあることも御坐ります、又其毒に中り毒に
遇たらば、ドンナ薬で療治が出来るか、此等も薬物學者
の研究すべきもので御坐ります、夫で今茲で初めよドウ
云ふ様お事をするかと云ふことを申しまして、夫から動
物に就て薬の働きを御目に掛け、其後茲に御坐ります
草などからドンナ性質の物が取れたかと云ふこと、即ち
見た所でハ立派な花が咲て、之は實が成つて、其中に恐
るしい物があつて、之をドウ云ふ方法で製し、ドウ云ふ
病に用ひて効が有る、ト云ふことを御話し申します、
(試験)先つ初めよコロ、ホルムを狗に嗅がして御覽に入
れます、尤も色々な方法が御坐ります、此所での極簡
單な方法即ち此海綿にコロ、ホルムを濡して犬の鼻に嗅
かせます、サウスルト初めよハ感覺が御坐りますが、後
よは仰向にしてもドウしても、更に感覺が無くあつて寐
た様になり、後にハ手足を折つて腹ビッコよ爲つて寐て
仕舞ひます、夫から此鳩にコロラルヒドラトを水に溶し

て與へます是を與へるにハ色々方法が有りますが、之
を飲薬に交せれば胃に入つて、胃から吸収して血に混し
て薬がききまする、又僅の量を以て早くきかせるにハ、
皮を摘まんで小さい針で溶して有るのを注込みます、是
を皮下注射法と申します、此外にも薬の用ひ方がある、
即ち灌腸と申しまして尻から入れることも御坐ります、
併し此方法ハ餘り用ひませぬ、又物に依て出来ぬことが
有ります、デ此鳩ハ活潑に立つて歩行くので御坐ります
が、此通り皮下注射法を施して、暫くすると段々きいて
來て眠つて仕舞ひます、段々翔るよ躓いて轉び、後よハ
倒れて寐て仕舞う、併し死だのでハ御坐りませぬから、
絶えず呼吸の運動を致します、又心臟の動氣も搏て居
る、御覽なさる通り段々甚い居眠りをしてユラリユラリ
と致しますから、モ一中を飛ぶ様お元氣は御坐りませ
ぬ、此狗ハ未だ十分よ薬がききませぬから、時間よ餘り
が有つたらモ一扁ヤツテ見たいと思ひますが、ドーモ
動物試験ハ一扁ヤツタ上で、復た試みる譯にハイキませ
ぬ、殊よ同じ犬でも薬が能くきくのとときかぬのがあつて、

只藥を嗅がせることが下手なばかりで無く、きくときかぬとが有つて餘程六ヶ敷ら御坐ります (以下次号)

○

アヒノ子ヨリ新種ヲ生スルコト

Origin of Species by Hybridation.

ブライブルグニテ 石川千代松

千八百八十六年ノ八月ニロンドン府ノ植木屋 James

Veitch ト云フ人ノ所有ナル *Sophronitis grandiflora* ト

Cattleya intermedia カ五年目ニテ始テ花ヲ生シ此二花ノ

間ニアヒノ子ヲ生ジタリ然ルニ此ノアヒノ子ヲ H. G.

Reichenbach ト云フ蘭科植物ニ有名ナル學者ニ送リタル

所此植物ハ *Laelia* 屬ノ植物ナリト云ハレ名ヲ *Laelia*

Batemanniana ト名ケラレタリ 卽チ A ナル屬ノ花ト B

ナル屬ノ花トノ間ニ出來タルアヒノ子ガ A B 二屬ニハ

類似セズシテ C ナル屬ノ花トナリタリ

Focke氏 (Ueber polymorphe Formenkreise in Bot. Jahrb. f.

Systematik, Pflgesch. u. Pflgeoz. von Engler. Bd. V.)

ノ實驗ニ因レバ *Rubus prinosus*, Arrh. 及ヒ *R. max-*

imus, Mar. ハ *R. caesius* ト *R. idaeus* トノ間ニ出來ル所ノ

アヒノ子ニ能ク類似スルモノナリ、アヒノ子ハ常ニ實ヲ

結ハザルモノナリト云ヘ別ニ左様ニ定リタリト云フコト

モ無キ様ナリ卽チ *R. caesius* ト *R. idaeus* トノアヒノ子

ハ實ヲ結ブコト甚妙ナレト *R. caesius* ト *R. tomentosus* ト

ノ間ニ生スルアヒノ子ハ隨分能ク實ヲ結ブト云フ、又タ

R. bifrons ト *R. gratus* トノアヒノ子ハ *R. villicaulis*

ト同クシテ *R. tomentosus* ト *R. vestitus* トノアヒノ子

ハ野外ニ多ク生スル所ノ *R. macrophyllus hypoleucus* ト

區別スルコト甚々難シ、Christ 氏 (Allgemeine Ergebnisse

aus der systematischen Arbeit von Genus *Rosa* in Bot.

Centralblatt. Bd. 18.) ハ歐洲ノ薔薇科ニ明ナル人ナル

カ同氏ニ因レハ *Rosa trachyphylla* Ran. ハ *R. gallica*

ト *R. canina* トノ間ニ生スルアヒノ子ト區別スルコト難

ク、*R. centifolia* ハ *R. gallica* ノ一變種一 *R. G. var.*

provincialis, Ait 及 *R. G. var. elata*, Chr. ノ間ニ出來

ルアヒノ子ニ能ク類似スルモノナリ

Hieracium ニテモ亦タ全シク人工ヲ以テ H. *flagellare*

A. patens トノ間ニ生スル所ノアヒノ子ニ能ク類似スレ

Hieracium ニテモ亦タ全シク人工ヲ以テ H. flagellare

ト H. subcymigerum トノ間ニ生セシメタルアヒノ子ハ

H. montanum ノ變種ト異ナルヲ無シ Jura 山及ヒ Alps

山西部ニ生スル H. scorzonerifolium ハ H. villosum ト

H. glaucum トノアヒノ子ニ寸分モ異ルヲ無シ、然ルニ

H. villosum. H. glaucum ノ二種ハアルプス山西部ニハ生

ゼズ、然ラバ H. scorzonerifolium ハ此二種ヨリ生ジタ

ルモノト考フテハ不都合ナルヤ、否不都合ナルヲ少々モ

無シ、余輩ハ只タ H. scorzonerifolium ハ昔時此ノ二種ノ

アヒノ子ニシテ其繁殖益々盛ニ遂ニ此ノ三草ノ間ニ生存

競争ヲ生シアヒノ子ノ勝ツ所トナリタルナラン、H.

Intybaceum ト H. ochroleucum トノ間ノアヒノ子ハ H.

Lantoscannum ト異ル所ナシ

Potentilla 屬ニテモ亦タ右ト同シク Potentilla splendens

Ram. ハ P. fragariastum ト P. alba トノ間ニ人工ニテ

生セメタルアヒノ子ト區別スルヲ難シ、

Anemone pulsatilla モ亦タ或ハ其ノ始ハ合ヒノ子ナラン

ト思ハル、所アリ何ントナレハ此ノ草ハ A. pratensis ト

A. patens トノ間ニ生スル所ノアヒノ子ニ能ク類似スレ
ハナリ

右ノ諸例ヲ以テ考ルキハ植物界ニ於テハアヒノ子ナルモ
ノハ新種ヲ生スルニ於テ大關係ヲ有スルモノ、如シ余ハ

固リ植物學者ナラザレハ植物ノ事實ニハ乏シト雖ヘ且日
本植物モ又タ右ノ如キアヒノ子試験ヲ施シ見ルキハ學術

上大ニ得ル所アランカト存スルナリ
千八百八十七年四月上旬

○ 世界各人種の弓箭放射法

文科大學 加賀 秀 一

此頃偶々昨年十一月刊行ノ雜誌「子一チユア」ヲ閱セシニ
其中ニ米國人エドワード、モールス氏ノ近著古今弓箭放
射式ト題セル書中ヨリ更ニ數項ヲ拔粹シタル者ヲ掲載セ
リ而シテ其事タル廣ク世界ノ各人種間ニ行ハル、弓箭ノ放
射法ニ異同アルノ事實ヲ蒐集セルモノニ一讀其事ノ頗
ル新奇ニシテ且ツ有益ナルヲ覺フ但タ編者未タ本書ニ就
テ充分閱讀スルノ閑ヲ得ザレバ其ノ果ノ事實ニ適スルヤ

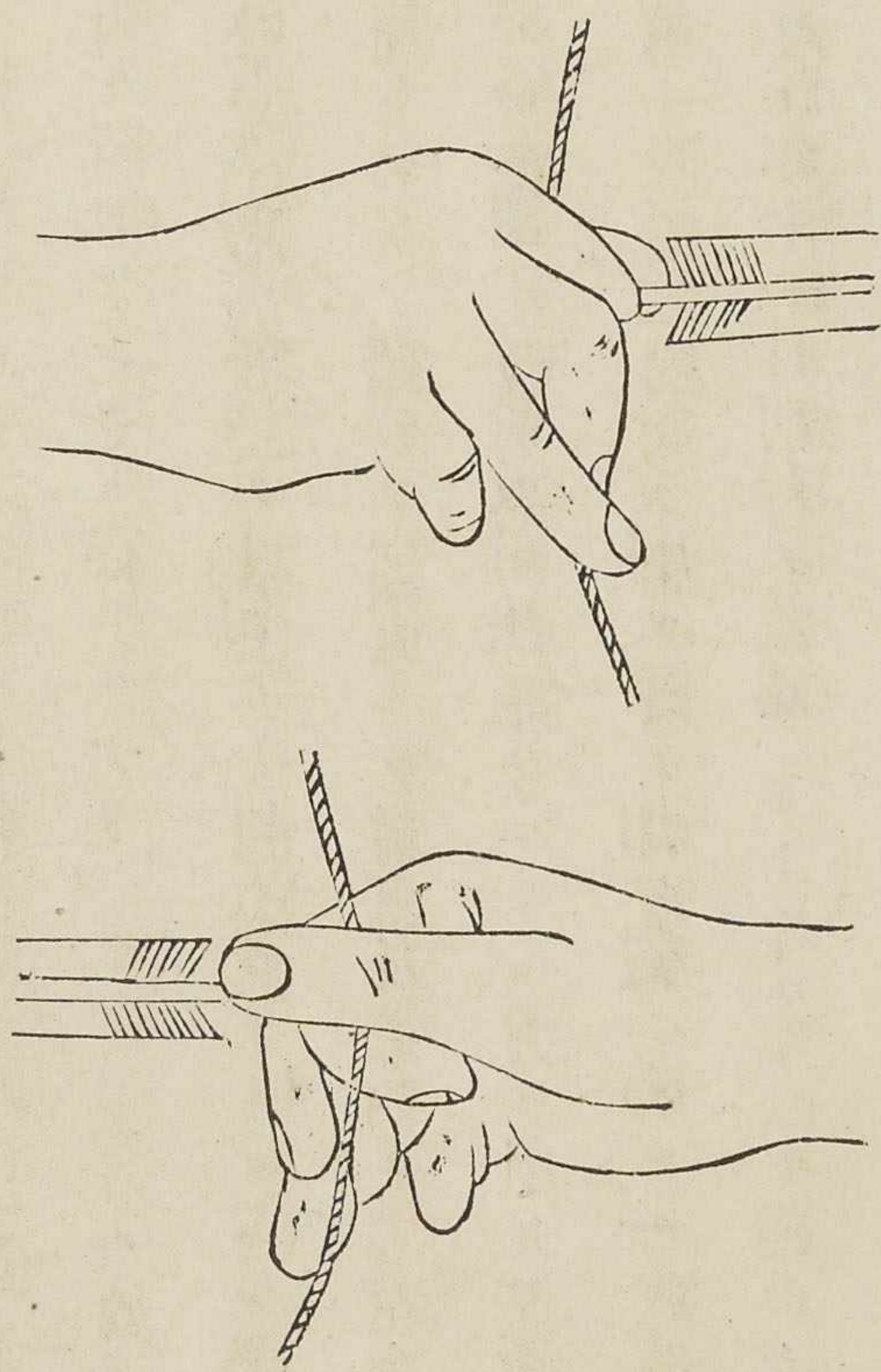
否茲ニ詳説スルヲ能ハズト雖モ意フニ社會學史學等ニ取
リテハ未ダ以テ裨補ナシトセズ因テ該雜誌ニ就キ其大意
ヲ譯載スルヲ左ノ如シ

蓋シモールス氏ノ初メテ此事ニ就キ起稿ノ念ヲ起サレシ
ハ曾テ日本ニ滯留中偶々英國人ト日本人トニ於ル放箭法
ノ異ナルヲ見タルニ起因シテ氏ハ當時大ニ之ヲ奇ナリト
シ只好事ノ心ヲ以テ其事ヲ研究セントスルノ意ニ止マリ
シカ後チ此等ノ事實ヲ蒐集スルニ及テ遂ニ世界各人種間
ニ於ル種々ノ弓箭放射法ヲ蒐集シ以テ其原理通則ヲ研討
セントスルノ感ヲ懷キ爾來勵精拮据所々ノ古蹟等ヲ歴覽
シ漸ク古今各地ノ人種間ニ行ハレタル弓箭放射ノ異同ヲ
考察シ以テ稍々完全ナル圖解ヲ得ルニ至レリ此ニ於テ先
キニハ見テ以テ好事ニ屬セル一小技ナリトセシモノ、今
ハ却テ首要ノ事トナリ乃チ若シ廣ク此原理ヲ探レハ竟ニ
推シテ世界人類ニ於ル種属ノ異同ヲモ知ルノ一端トナル
ベキヲ發見シ此ニ於テ氏從來自家ノ研討ニ係レル事實
ヲ更ニ綱羅編纂シ其書ヲ古今弓箭放射式ト題シ以テ世ニ
公ニセリ今氏カ書ニ據テ弓箭放射式ノ種類ヲ擧ケンニ大

畧分テ左ノ五種トス

第一普通弓箭放射法 此ハ最モ簡易單純ナル射法ニシテ童
子ノ知ラズ知ラズ用ヰル法ナリ其方法ハ先ツ大指ヲ延長
シ并ニ食指ヲ屈曲シテ其第一節及第二節トノ間ニ箭ヲ挾
ムヒトサシユビ（第一圖ノ如シ）

第一圖



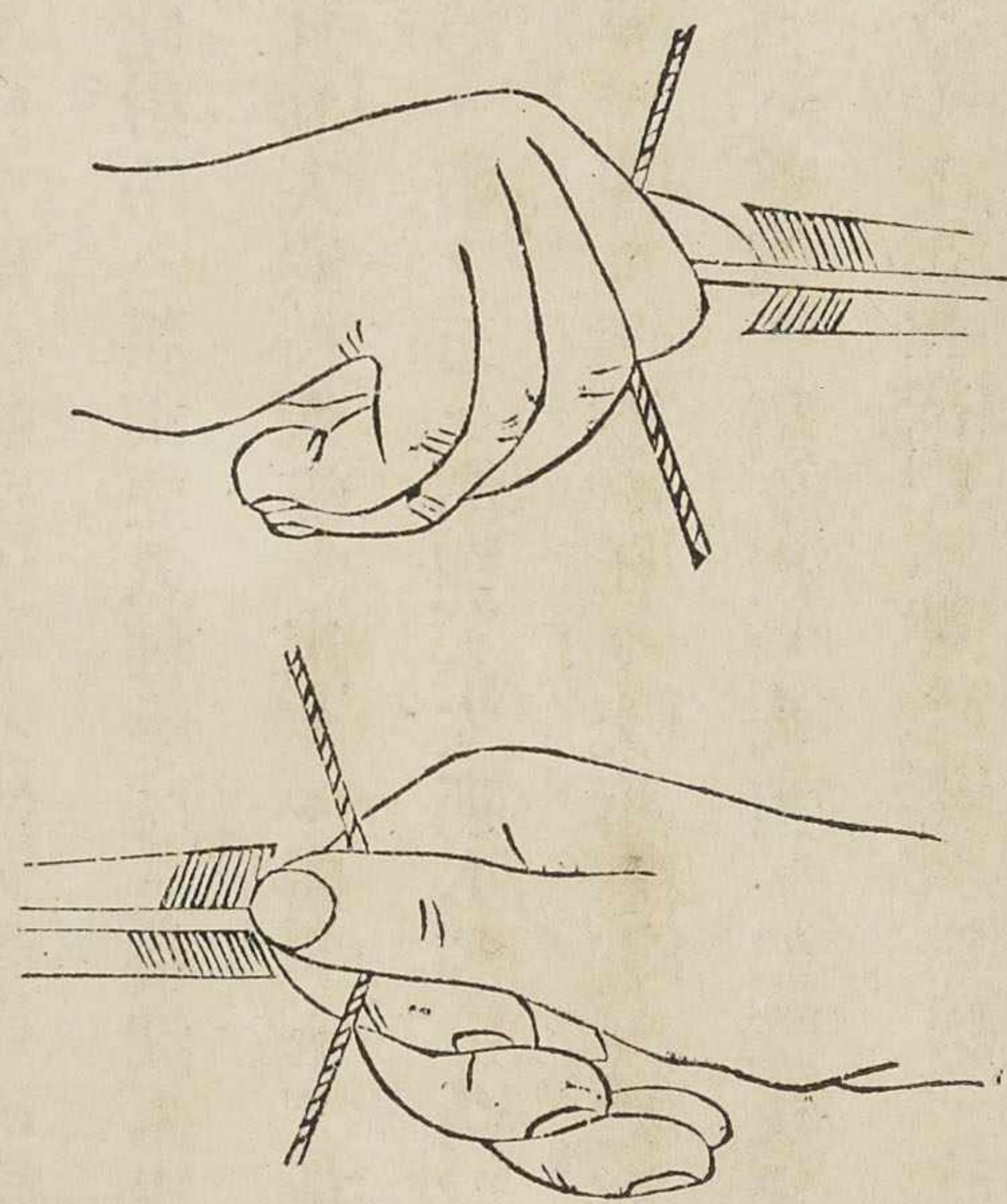
モールス氏ノ説ニ據レハ弱弓ニテハ第一法ヲ用テ最モ簡
便ノ法トス（例ヘハ揚弓ノ如シ）何トナレハ此法ニ依テ弓
ヲ堅ニ握ル以上ハ其箭尖ノ弓ノ左傍ニ在ルト右傍ニ在ル
トヲ問ハザレバナリ然レモ強弓ニテハ非凡ノ力ヲ有スル
者ノ外能ク此法ニ依リテ遠ク射ルヲ難シ故ニ簡易ナル此

公ニセリ今氏カ書ニ據テ弓箭放射式ノ種類ヲ擧ケンニ大

者ノ外能ク此法ニ依リテ遠ク射ルヲ難シ故ニ簡易ナル此

方法ハ今尙ホ未開人中ニ多ク行ハル、者ニノ北海道ノ蝦夷人ノ如キハ古來ヨリ此法ヲ慣用セルモノナリ又デメラ、ユテ及ナヴァジョイス等ノ米國土人中ニモ亦行ハル、所ナリ就中ナヴァジョイス人ガ彼ノ穴居ノプレーリードツグ Prairie dogs(獸名犬ニハ非ズ)ヲ獵スルハ此簡易ノ射法ニ由テ弱弓ヲ用ルト云フツハ放射セル箭ノ偶々過テ犬ニ中セザルモ其弓勢弱ケレバ其箭ノ地中ニ入ラザルガ故ナリ又チペワース人及シヤロール灣ノ北岸ニ位セルカスカペディア植民地ノ北米土人ミクマック屬ハ此ノ射法ヲ用ユ其他カナダ州中ミクマック四近ノ諸屬モ亦此ノ射法ニ據ラザル者少シモールス氏會テムースベツド湖ノ近傍ニ占居セルペノブスコット種屬ノ一人ニ遇ヒシ時此方法ノ外猶ホ放射ノ法許多アルヲ説キシカバ之ヲ聞キ不信ノ容体ナリシト亦以テ此邊ニ行ハル、射法ノ如何ヲ知ルヘキナリ」第二ノ射法 此ハ第一ノ射法ノ稍々變遷セルモノニメ此方法ハ第一ノ如ク先ツ大指ヲ延シ食指ヲ屈シテ箭ヲ挾ミ然ル後チ第三將指及第四無名指ヲ以テ弓弦ヲ我方ヘ引寄セルヲナリ此射法ハ首ニヲタワ、ズニ、チペワ

第二圖

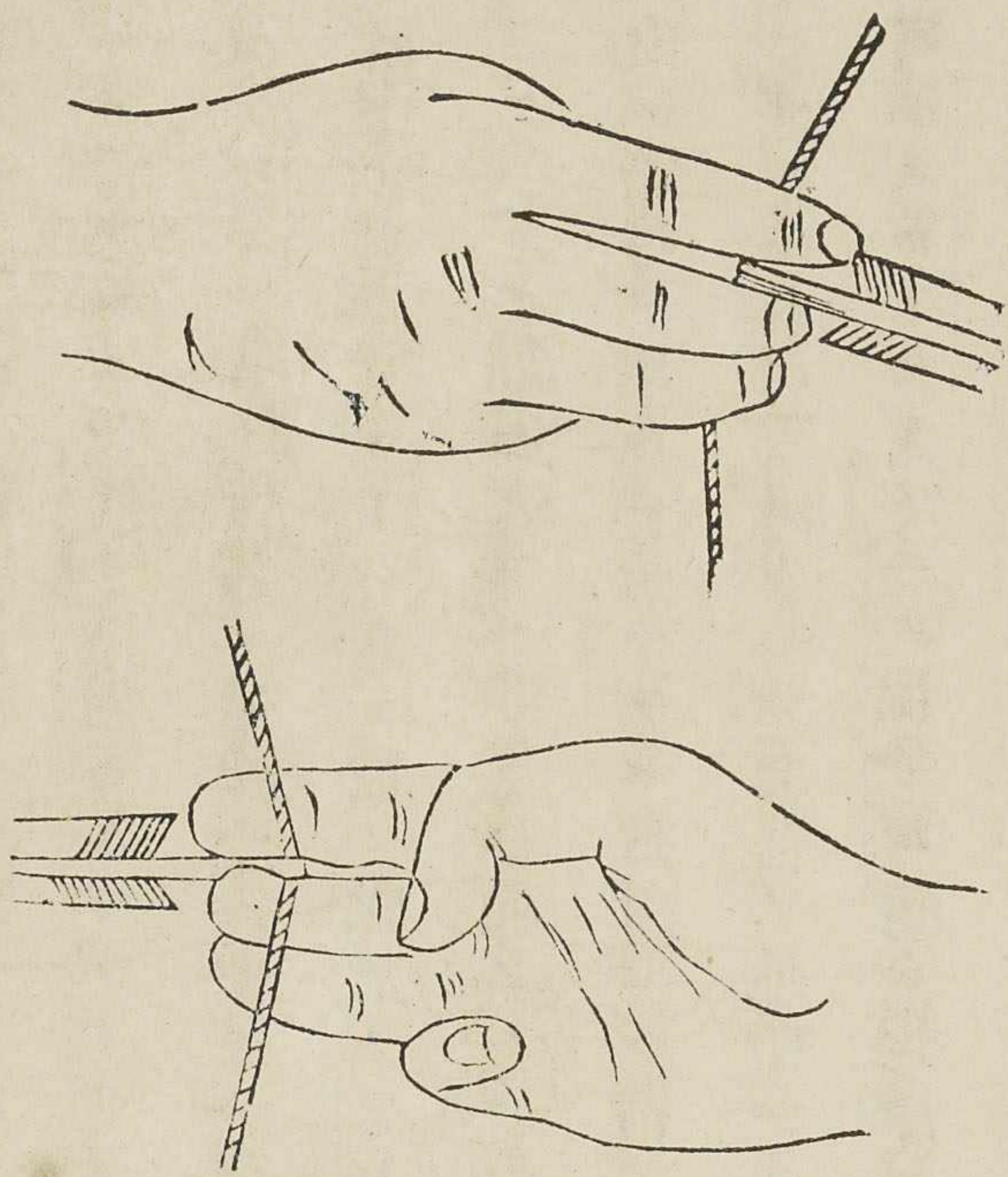


イス等ノ北米土人中ニ行ハル、所ノモノナリ(第二圖ノ如シ)

第三ノ射法 此ハ第二ノ射法ト大同小異ノモノニ即チ食指ヲ屈セズシテ殆ンド延直ニシ第三及第四ノ二指モ亦之ト同ク延直ニシ以テ弦ヲ引寄セルヲニカチ用井又大指ヲ用テ第一及第二射法ノ如ク箭ヲ引寄セルヲナリ此法モ亦印度人中多ク見ル所ノモノニノス、アラポオリス、シエンヌ、アツシンポインヌ、コマンチエス、クロリス及ビブラックフヒート等ノ諸屬モ同ク此射法ニ依レリ亞細亞洲ノ中ニテハシヤムロ等ノ射法ハ只其第四指即チ無名指ヲ用井ザルノ外餘ハ以下ノ射法ト相同シ又ベンカル灣中ノアンダマン島人モ等ク此射法ヲ用ルトハ曾テマン氏ガ人類學會協會ニ於テ述べタル説話ニ由テ知ラル、ナリ

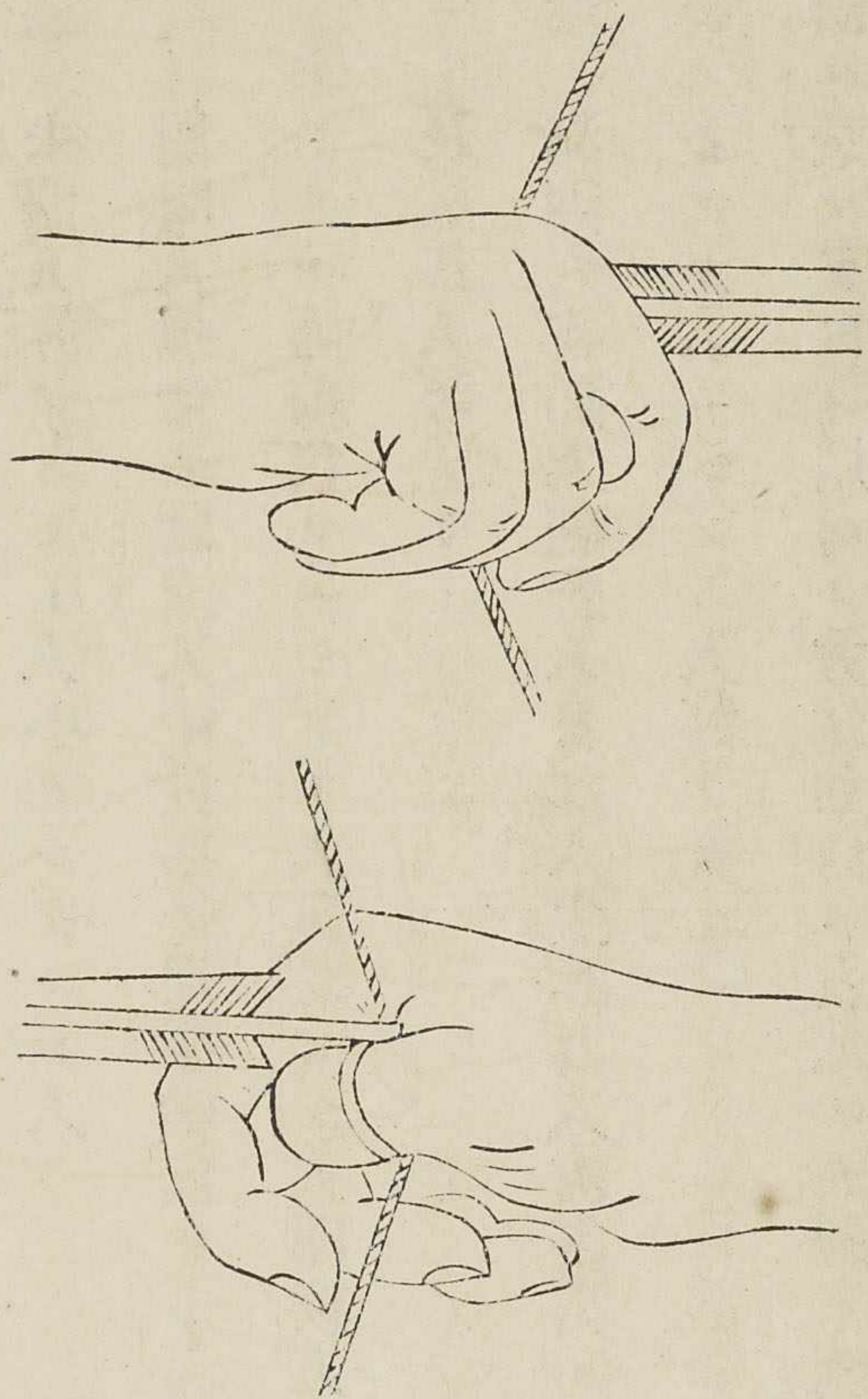
第四地中海沿岸射法 此射法ハ數百年來地中海ニ瀕接セ
 ル諸國ノ間ニ行ハル、モノニシテ現今ノ英佛等ノ諸民モ亦
 此法ヲ慣用ス是レ又中世期ノ歐洲人カ一般ニ用シ所ノモ
 ノナリキ其射法ハ食指以下第四指即チ無名指迄以上三本
 ヲ用テ弓弦ヲ引寄セ其箭ハ食指ト將指ノ間ニ狹ミ別ニ大
 指ヲ勞スルヲナシ而シテ殊ニ其箭ヲ挾ム兩指ニハ革ヲ用テ
 作レル袋(本邦ノ弓掛^{ユガケ}ノ如キモノカ)ヲ被フ是レ三百年前
 ノローガト、アスカム氏ノ著書トコフ并ラス中既ニ記載
 セルヲ以テモ其襲用ノ舊キヲ知ルヘシ只其箭ヲ弦ニ接^{ツカヘ}

第三圖



スルヲ至リテハ(本邦ニ異リテ)其位置常ニ弓ノ左傍ニ
 在リアラスカノエスキモ一人ノ射法又稍々之ニ近シト雖
 其第四指ヲ用井ザルヲ少ク前法ニ異ナレリトス而シテ此
 射法ハ獨リエスキモ一人ニ限ラス北極地方ニ住スル者ノ
 一般ニ用井ルモノ、如シ(第二圖ノ如シ)
 以上叙列セル四種ノ射法ノ如キハ多少其方法ニ異同コソ
 アレ其大體ニ至リテハ其趣ヲ同フシ而テ順次變遷シタル
 モノナレトモ後ノ第五ノ射法ハ前四法ト異リテ較ク特殊ノ
 方法ナリト云フベシ
 第五蒙古ノ射法 此法ニ據レハ先ツ大指ニテ弓ノ弦ヲ引
 寄せ他ノ二指ヲ以テ之ヲ輔ケ箭ハ大指ト食指ノ間ニ挾ミ
 而シテ其指底ヲ用テ箭ヲ支ヘ又箭ハ常ニ弓ノ右傍ニ位セシ
 ム蓋シ此射法ハ亞細亞人種中特ニ滿洲人支那人朝鮮人日
 本人土耳其人波斯人等ノ用井ル所ニシテ放射ノ時大概チ
 大指ニ袋ヲ被フ而シテ滿洲人支那人等ハ角、象牙、若クハ
 瑪瑙等ニテ厚キ指輪ヲ作り大指ニ貫シ之ニ代用スト云フ
 又日本人ハ革製ノ袋ヲ用テ大指ト第二及第三指ニ被フ(弓
 掛ヲ云フナリ)(第四圖ノ如シ)

第四圖



以上ハ放射法ノ首ナルモノニテ現今尙ホ各地ニ行ハル、
 モノナルガ古代人ハ如何ナル法式ヲ用ヰシカト云フニ
 アツシリヤ人及エジプト人ハ初メ第一法ヲ用ヰ後第二法
 ニ移リ竟ニ第四法ヲ用ヰシモノナラン
 氏又希臘波斯日本支那印度メキシコ等ノ射法ヲ述ブルニ
 當テハ此等ノ中種々ノ用法アリテ爲メニ其判別ニ苦ミタ
 リ然レモ凡ソ人種中ニハ孰レモ一種普通ニメ永久不滅ノ
 性アリテ存スルヲ亦疑ヲ容ルベカラス即チ數百年間蝦夷
 人ト日本人ト戰ヒシガ故蝦夷人ハ夙ニ日本人ノ射法ヲ學
 ビシナランニサハナクシテ却テ其固有ノ法ヲ墨守シタル
 ハ其ノ一種固有ノ射法アルヲ証スルノ一例トスヘシ實ニ

蝦夷人ハ其近鄰中唯僅ニカムチヤツカ人ヲ除クノ外盡ク
 皆蒙古ノ射法ヲ用ヰルノ人種ナルニ斯ノ如ク頑然古法ヲ
 守リテ動カザルハ全ク特殊ノ人種ナルヲ知ルノ一証ナ
 リトス

今此等五種ノ射法中第四及第五法ヲ以テ勝レリトス而シテ
 又之ヲ用ヰル人種ハ他ニ勝レテ人類歴史中最大ニメ且ツ
 最強ナルハ歐人ト亞人ナルヲ知ラバ其射法ノ特ニ他ニ
 勝レタルモ亦怪ムニ足ラザルナリ凡ソ宗教言語習慣等ノ
 如キ人心ノ表示物ハ常ニ一勝一敗漸次轉遷進化シテ其底
 止スル所サヘ知ラレザル世ノ中ニ於テ唯リ放射ノ一法ノ
 ニ依然變ズル所ナキモノ、如ク各地ノ人種各々其射法ヲ
 異ニセルハ洵ニ奇ト謂フヘキナリ
 下ニ判別セル表中ニ於テ見ル所ノ第一第二及第三ノ諸射
 法ハ現今尙ホ未開人中ニ行ハル、モノニメ第四及第五ハ
 開明人中ニ行ハル、所ノモノトス然ルニ茲ニ一ノ破格ト
 モ稱スヘキハ小アンダマン人ニメ第四法ヲ用ヰ大アンダ
 マン人ニメ第三法ヲ用ヰ又エスキモーノ各部落ニメ却テ
 第四法ニ類似セルモノヲ用ヰル等是レナリ蓋シ此等ハ所

謂世態ノ變遷ニ際シ世ノ奇運ニ遇フテ其種屬中ノ人或ハ之ヲ他邦ニ習フヲ以テ致セルモノ歟

第一法 未開人蝦夷人、デマテラ印度人及北米印度人中諸屬

開明人前代アツシリヤ人エジプト人及ギリキ人

第二法 未開北米印度人中諸屬

開明人後代アツシリヤ人及印度人中

第三法 未開人北米印度人大アンダマン人

開明人シヤムロ人エジプト人ギリキ人及メキシコ人

第四法 未開人エフキモ人小アンダマン人

開明人現今ノ歐米人中世期ノ弓手後代ノアツシリヤ人前代ノエジプト人アラビヤ人印度人及羅馬人等ナリ

第五法 滿洲人支那人朝鮮人日本人士耳其人波斯人シ

イシヤ人エジプト人等ナリ

氏其結語ニ於テ又曰ク用弓ノ方法如何ハ古代ノ人種ヲ判

別スルノ一助タレハ旅行者并ニ學術研究者ハ唯何々人種ハ弓箭ヲ用井ルナリ又何々ハ用井ザルナリトノヲ以テ甘セス進テ左記ノ諸項ニ注意スベキナリト即チ第一弓手ノ位置、第二弓ヲ豎ニ握レルヤ横ニセルヤ第三箭尖ハ立テタル弓ノ右傍ニ置クヤ將タ左傍ニ置クヤ第四用意ノ乙箭ハ弓手ノ方ニ持スルヤ又ハ右手ノ方ニ持テルヤ等ノヲニモ注意スヘキモノナリト

雜報

○磁力測定 先般理科大學物理學教師ノトツ氏ハ本邦北部同助教授田中館愛橘氏ハ南部ヨ出張シ磁力ノ強弱變化等を實測スベキ命を受けたり依テノツト氏ハ近日の内東北地方ヨ向ヒ旅行シ本州東西兩岸并ニ北海道を測量シ又田中館氏ハ西南ヨ向ヒ東海道、中國、九州、朝鮮各地ニ赴クノ豫定ナリト且右磁力測定ハ航海術、測量術、天文、地理の諸科ニハ最有益の事業ヨして近年理科大學ヨ於テ研究せる事項中ヨ屈指スベキ要件ナリト云ふ因ニ記を磁力測定ハ我國測量術の元祖伊能忠教氏寛政享和の頃幕府

の命を受けて全國を測量せし時之を行ひしとあるも奈何せん磁力の年々變るものよして今昔と異なり又近年の實測に係るものあるも精密ならざる点あれば今回ハ猶一層詳密を主とする見込なりと

○帝國大學 各分科大學々生卒業証書授與式は來七月九日午前八時工科大學中堂に於て施行し同日午後より小石川植物園に於て園會を催ふさる、由

○英國の學士會院 ロンドン府ノ「ロヤル、ツサイター」ハ英國の學士會院とも稱す可きものよして其會員に撰擧さる、は學者の常に希望する所なり姓名の下に「F.R.S.L.」

(「ロンドン、ロヤル、ツサイター」會員ノ畧記)と記するハ學者社會よ於てハ遠く爵、勳、等の上よ出るの榮譽とす蓋し此會ハ毎年僅よ拾五名の入會を許し之を撰擧する人ハ皆具眼の大家なれば學問上眞實の價値有るに非ざれば々決して撰擧されざるを以てあり本年撰擧されたる會員中ハ先よ我大學よ於て物理學の教師ありしユーイング氏並現よ工科大學の教師にて有名なる地震學者ミルン氏の名有り吾輩ハ右二氏を祝し且大學の舊及現教師中に「

R.S.L.の數名有るハ以て我大學教師よ其人を得たるを徴するに足れりと悦ぶなり

○大不列顛理學獎勵會 より或る社友の許に達したる報告に由れば本年八月三十一日マンチェスター府ニ開く集會の役員は左の如し

會頭 ツル、エッチ、イー、ロスコー Sir H.E. Roscoe

部會頭

A部 數學物理學

教授ツル、アール、エス、ボール Prof. Sir R. S. Ball

B部 化學

エドワード、ジャンク Edward Schunck

C部 地質學

ヘヌリー、ウードワード Henry Woodward

D部 生物學

教授エー、ニートン Prof. A. Newton

E部 地理學

メーション、ジェテラル、ツル、チャールス、ウォレン

Major-General Sir Charles Warren

F部 理財學及統計學

ロベルト、ギッフェン

Robert Giffen

G部 工學

教授 オスボン、レフルツ Prof. Osborne Reynolds

H部 人類學

教授、エー、エッチ、セース Prof. A.H. Sayce.

○チンデル氏 有名なる物理學者チンデル氏ハ一千八百五十二年より二十五年間ロンドン府「ロヤル、インスチテューション」に於て物理學の教授なりしが追々寄る年波と病氣の爲め遂に其職を辭したり氏の物理學上貴重ある研究を爲したるハ何人も善く知る所なり又氏ハ理學上の知識を俗間に廣め世人をして理學の功用を知らしむる事ハ最功績有る人あり看客諸君中にも氏の名を知らざる人は無かる可し

○佛蘭西人の死亡 パリス府のルヴァツツール氏の統計によれば佛蘭西人の死亡の割合は百年前より比して大に減少せり一千七百八十九年より二千人の稚兒(二歳以下)の中生存する者は一千八百八十六人現今ハ一千四百六十人あり

又二千人の中四十歳に達する者、一千七百八十九年より七百三十八人現今ハ一千百十人あり七十五歳まで生存する者百四十四人なりしが今は三百六十人ありと云ふ

○信仰を受くる動物 先頃北京の東洋學會に於てオッエン氏が支那人の信仰する動物と云ふ題よて演説せし大意に支那人の最信仰深きハ狐、^{イヌチ}鼯、針鼠、蛇の四種よして之を不死の生物と稱し又天津地方よてハ鼠をも其中に加ふるとなるが右等動物の勢力甚強大にして往々佛法をも壓せんずるとあり云々然るよ他の學士ハ支那人ハ前記の外尙馬、牛、犬、虫、龍、獅々等を祭り五月には五毒生と稱し百足虫、^{カダ}蜥蜴、^{トカゲ}主簿虫、^{サツリ}蛙、蛇に祈願する由を述べたり又他の論者ハ昔ハ今の如く動物を信仰せざりしとて典籍を引て証明せんと試しも(子不語怪力亂神でも擔き出せしか)痛く駁撃を蒙り斯かる事ハ何處も人文未開の昔に多かるべしとの説に歸したり鄰家の話の序よ我國にてハ奈何と云ふよ全國到る處(四國を除き)繁昌とるハお狐様にて他よ之と比敵とるものなし、尤有名なる、犬神、お酉様、三王のお猿などは別て難有池の大蛇ハ旱魃の時兩乞して利益

著し但し大黒様の御使物ある鼠、春日大明神の鹿、處々の神佛境内に養ふ馬、魚、鶏、鳩、龜などを害すれば罰の當るは勿論あれども之より祈願を懸け御利益ある乎（前に鯛の頭を書き載せるとを忘れたり）又利益を與へ玉ふ程の御位のある者なるや承知せず念の爲め聞かま欲しきものあり

○新發明ソヂウム製造法 ソヂウムハアルカリ金屬の一よして其需用廣き中にもアルミニウム、マグネシウム等の金屬を製造するよ最も必用あるものあるが從來施行するソヂウムの製造法ハ甚だ不完全にして且つ高熱度を要するが故よ其製出するソヂウムの分量甚だ少きのみならず器械を破損すると屢々なれば其費用頗る多く之が爲めよ現今アルミニウムの如き有用ある金屬を廉價に製造すると能はざるハ實に遺憾とする所あり然るに近頃の發明よ係るカストナル氏ノソヂウム製造法ハ至極簡單にして器械の破損も少なく且つ其仕組を大よするの便利あるが故に従前の如く炭酸ソーダと炭を以て製造する法ニ比すれば僅か四分の一の費用を以て同量のソヂウムを製造し得ると云ふ英國の工業雜誌に就きて其新法の大意を記

せん先づ細かき鉄粉とピツチを適宜混合し坩堝に納れて灼熱したる後之を碎きて細粉と爲し又之に苛性ソーダの適量を混し再び坩堝に納れて攝氏八百二十三度許の熱よ當つれば則ち水素を放散して純粹のソヂウムを蒸溜す而して其坩堝に残れる炭酸ソーダハ復た之を苛性ソーダと爲して用ひ得るあり扱現今ソヂウムの代價ハ一磅よ付き英貨四志なるも此新法を以て製造すれば其一磅の代價ハ必らず一志に下落すべきを以て今後益々此法の行へるよよ至らばアルミニウムの代價も亦隨て下落すると勿論なれば豫て企望する如く此金屬を諸般の需用に供するを得べし云々

○東京新聞記者の獨乙語讀方 某々大新聞中目耳曼ゼイラング新聞とか又た伯林タゼブラットとか記載あるを往々認るが右ハツアイツング（新聞）又ターゲブラット（日報）と讀べきを該記者獨乙語の發音を知らざれば自己流よ音を附したるなるべし若し獨乙新聞中ホーヒシンブンとか又ハイ、シンポウと記載せば無識者ハ其何たるを解せず又識者ハ該記者が報知新聞及時事新報を自己流即ち

獨乙風よ讀みたるの誤を悟り私かに其愚を笑ふなるべし

獨乙新聞の名ハツアイツングヤターゲブラットの外仍は

數多あり之を一々日本新聞記者自得の讀方よて讀まばア

ンツアイガル (Anzeiger) をアンゼイゼル、ナフリヒト

(Nachricht) をナチリヤト、ツァイトシュリフト (Zeitschrift) 新報 雜誌

をゼイトスチリットを記するの類陸續紙上に現出するに

至るべし東京の新聞記者先生よせめてハ同業の新聞と云

ふ字丈けは各國の語音を學んでは如何

○佛蘭西理學獎勵會 Association Francaise pour l'avance-

ment des Sciences 本年九月廿二日より廿九日の間佛

國ツールース (Toulouse) 府に於て開會するとの事なり定

めて種々有益ある演説等もあるなるべし

○オデッサ大學 魯國政府にてはオデッサ大學中に醫科

大學を設るを計畫中なりとの事は本年三月廿四日の醫

事週報よ見へたり

○壤都ウ井ーン府住民死亡の割合、壤太利國首都維那府

於て一昨年中死したるものは二万九千九百七十六人ありし

か昨年ハ二萬〇八百六十九人の死亡即ち住民一千人よ付

26,700 に減せり此中にて初生兒の死亡ハ一昨年ハ五千七
百五十五人即ち一千人の中 26,700 にして昨年ハ五千五百
四十六人即ち一千人の中 26,387 ありと雖どもベルリン
府に比すれば全体の死亡數大ある割合よハ小兒の死亡少
なし今茲に其死因を掲ぐ

肺 結核 五千百卅八人 即ち一千人ノ中 24,62

肺 炎 千九百卅九人 即ち一千人ノ中 9,29

吐瀉病、胃并 千五百六十六人 即ち一千人ノ中 7,50
に腸カタル

心 臟 病 八百五十人

氣管支炎 六百五十八人

卒 中 四百六十七人

ヂフテリア 三百七十二人

麻 疹 三百三十八人

天 然 痘 二百〇四人 (昨年ハ八百七十五人)

百 日 咳 百三十七人

猩 紅 熱 百二十四人

腸 チ フ ス 八十五人

頸部疾患 百七十四人
○本誌原稿 法科大學教授富井政章同和田垣謙三文科大

學政受卡岡請工科大學教授渡邊度同白石直台醫科大學

諸君ト共ニ學ブ所アラント期スルナリ

學教授末岡精一工科大学教授渡邊渡同白石直治醫科大学
 教授榊俣理科大学教授小藤文欠郎并に第一高等中學校教
 諭久原躬絃の諸君が大學通俗講談會に於て爲されたる講
 談の筆記ハ已に講師の校閱済のものも有り又現に校閱中
 のものもあり其外にも貴重ある原稿澤山有れども何分餘
 白無きを以て号を追て掲載せんとし看者之を諒せよ

○本社へ寄贈せられたる書籍及雜誌

○交詢雜誌 第二百六十号より
 第二百六十二号迄

○大日本教育會雜誌第五十六号

○成立學舍女子部講義錄 第一号
 第二号

○國民之教育第一冊

交詢社
 大日本教育會
 中原貞七君
 興文社

雜錄

○ソクラテス氏ノ傳 法科大学教授 和田垣謙三

緒言 久徵館ニ於テ講演

ソクラテス氏ハ希臘ノ人ニテ泰西哲學者ノ泰斗タリ而シテ
 氏ハ獨リ一大哲學者トシテ尊重スベキノミナラズ又最モ
 敬愛スベキ一大聖人ナリ予ハ今哲學者タルソクラテスヲ
 バ後日ニ讓リ茲ニ聖人タルソクラテスヲ諸君ニ示シ以テ

諸君ト共ニ學ブ所アラント期スルナリ

○誕生、兩親、壯年、ソクラテス氏ハ紀元前四百六十九
 年ヲ以テ希臘アツチカ州ノ一小村アロペースノ貧家ニ生
 ル父ハ彫刻師ニテ母ハ産婆タリ氏夙ニ父ノ業ヲ學ビ父死
 シテ後尙ホ彫刻ヲ業トシタレト性素ト之ヲ好マズ閑アレ
 ハ則チ其好ム所ノ哲學ヲ修ム偶マアゼンノ一富人クライ
 トナル者氏ノ才ヲ愛シ托スルニ其子ノ教育ヲ以テス氏此
 ニ於テ彫刻ノ業ヲ廢シ專ラ教育ノ業ニ從事シ傍ラ眞理ヲ
 研究セリ

○兵士 アゼントスバルマトノ間久シク干戈ノ事アルニ
 當リ氏モ國制ニ依リテ兵ニ加ハリシガ立ドコロニ勇敢ト
 忍耐トヲ以テ其名ヲ顯シタリ一日寒氣凜冽衆皆毛皮ヲ被
 ムルニ氏ハ平日ニ異ナラズ弊衣跣足能ク氷上ヲ奔走シ其
 舉動ノ活潑ナリシハ靴ヲ穿ツ者ノ遙ニ及バザル所ナリキ
 其能ク飢渴ヲ凌キ又嗜慾ニ克ツニ至テハ全軍驚カサル者
 ナク其戰フニ當テヤ進退規律アリテ怯者爲ニ奮フ氏ノ戰
 中ニ於テ精神自若ニシテ餘裕アリシヲ示スルニ足ル一事
 アリ一日曉起シテ陣前ニ立チ沈思默考午時ニ至ルモ去ラ

黄昏ニ至ルモ尙去ラズ翌朝日ノ出ヅルニ至リ仰イデ天ヲ拜シ陣中ニ歸レリト以テ氏ノ戰中ニ於テ猶ホ眞理ヲ研究セシ一斑ヲ知ルベキナリ

○公會議員、ソクラテス年六十二シテ初メテ公會議員ト爲リシガ其才智ニ富ミ且ツ正義ヲ守リテ動かザルニ至テハ五百ノ議員中嘗テ一人ノ氏ノ右ニ出ル者ナカリキ氏ノ

議長タリシ時（議長ハ議員順番ニテ其席ニ就ク）一大事件起レリ即チアラ

ギニユセ水戰ノ際討死者ノ屍ヲ葬ラザリシ故ヲ以テ其水

師提督數名ヲ罪スルノ議是ナリ（當時ノ風俗ニテ死者ノ屍ヲ埋葬セザルコトヲ無

上ノ罪トセリ）蓋シ此役暴風激浪ノ爲メ死者ノ波間ニ浮沈セル

者ヲ收拾スルコト頗ル困難ナリシカバ將官ハ已ムヲ得ズ此

事ヲ部下ノ士卒ニ命シ置キテ去リタルニ士卒竟ニ其命ヲ

遂ゲザリシナリ故ニ假令當時ノ事情ヲ問ハズ怠慢ノ罪免

ルス可ラストスルモ罪ス可キ者ハ將官ニ非ルナリ然レモ

衆中將官ヲ惡ム者アリ強ヒテ之ヲ罪ニ陷イレ之ヲ死ニ處

シ且ツ之ガ財産ヲ沒收セントセシニ氏ハ其議案ノ不正ナ

ルヲ知リ痛ク之ヲ排撃セリ然ルニ他日他人ノ議長タルコ

當リ將官等遂ニ死罪ノ宣告ヲ受ケタリキ此如ク氏ノ

正義ヲ守リ動かカス可ラザルヲ見テ小人輩ハ大ニ之ヲ嫌惡シ未タ幾クモ無クシテ此聖人ヲシテ空シク獄中ノ鬼トナラシムルニ至レリ嗚呼暴風ノ爲ニ倒ル者ハ曷々空ニ靡クノ楊柳ニ非スシテ亭々雲霄ニ聳ユル松柏ナリ然レモ人生楊柳ト爲テ生キンヨリハ寧ロ松柏ト爲テ碎クルノ勝レルモノアルナリ

○哲學 ソクラテスノ最モ長スル所ハ哲學ナリト雖モ別

ニ學校ヲ設ケズ又弟子ヲ蓄ヘズ常ニ謂ヘラグ予ノ行テ道

ヲ講ズル所是學校ナリ予ノ言ニ耳ヲ傾クル者是レ弟子ナ

リト故ニ家ニ在ルコト稀ニシテ常ニ外出ス出ヅレバ乃チ稠

衆ノ中ニアリテ談論スルヲ事トセリ決シテ郊外ノ遊ヲ爲

サズ或人之ヲ詰ルニ氏答ヘテ曰ク予學ヲ好ム郊外ノ菓木

何ヲカ能ク予ニ教ヘンヤ予ヲ教フル者ハ唯其レ市府ノ稠

衆ナル哉ト其人ト語ルヤ貴賤貧富老若男女ヲ問ハズ苟

モ教ヲ求ムルモノアレバ懇々道ヲ説キ終日倦ムナシ

其人ヲ教導スルヤ專ラ問答ヲ用ユ其對話ノ初メニハ

極メテ單簡ナル問答ヲ設ケ答ニ應ジテ漸ク難題ニ進ミ

其初メ氏ヲ輕ンシ自ラ高シトスル者ヲシテ遂ニ已ノ

無智ヲ覺ラシムルニ至ル衆中固ヨリ是ニ由リ感歎
スル者多シト雖モ又爲メニ氏ヲ惡ムモノアリ是レ
亦氏ガ後日禍ヲ招クノ基本トナレリ嗚呼才無レバ人之ヲ
愚トシテ笑ヒオアレバ人之ヲ賢トシ妬ム人ノ世ニ處スル
亦難イ哉

○ソクラテスノ賢 ソクラテス氏博學多識深ク哲學ニ達
スルノ外算術幾何星學博物修辭醫學ノ諸科盡ク通曉セザ
ルナク世ノ賢人タルヲハ當時世評ノ許ス所タルノミナラ
ズ謙遜ナル氏モ尙且自ラ之ヲ許スニ至レリ史ニ稱スデル
フイ(神)ノ神告ソクラテス氏ヲ以テ當世第一流ノ人トセ
リ氏ハ之ヲ聞テ疑ヘリト雖モ亦妄リニ神告ヲ疑フノ非ナ
ルヲ知り其信僞ヲ正サント欲シ先ツ當時賢明ノ聞ヘ最モ
高カリシ一政治家ヲ訪ヒ質ス所アリシガ其人タル時人之
ヲ賢明トシ且自カラ許ノ賢トスト雖モ氏ハ其實賢ト稱ス
可カラザル所以ヲ覺レリ因テ氏自カラ謂フ彼モ我レモ固
ヨリ無智ナルノミ然レモ彼ハ知ラズシテ自カラ知レリト
念ヒ我ハ我が知ラザルヲ知ル是レ我ガ彼ヨリ賢ナル所
以ナリト次ニ有名ナル詩人ヲ訪ヒシニ雄辯滔々文辭巧妙

ナリト雖モ嘗テ自カラ其言フ所ヲ解セズ是亦賢ト云フ可
ラズ終リニ工匠ヲ訪ヒシニ固ヨリ其技ニ長シ其術ニ熟ス
ト雖モ自カラ其能ニ誇リテ知ラザルヲモ尙ホ知ルガ如ク
能ハザルヲモ尙能フガ如クセリ是又賢トスルニ足ラズ是
ニ於テカ氏ハ始メテ已ノ當世ニ於ケル賢人タルヲ信ズル
ニ至レリ曰ク予ハ常ニ已ノ學ノ足ラサルヲ知リ日夜汲々
尙ホ其得ル所ナキニ苦メリ然ルニ天下ノ名士ナル特稱ヲ
專有スル者ヲ見ルニ其學フ所知ル所誠ニ淺陋ナルニモ拘
ハラズ自ラ以テ已レニ若ク者ナシト爲シ進ンデ學ブ所ヲ
知ラズ是レ賢ト稱スルニ足ラザルナリ予ハ則チ然ラズ知
ラサルヲ知ラズト爲シ足ラザルヲ足ラズト爲ス故ニ進ン
テ求ムル所以ナリデルフイノ神告誠ニ所以アル哉ト

○告訴、當時勢カアル詭辯學派ノ一人特ニソクラテス
氏ヲ惡ミシガ遂ニ公會ニ訴ヘテ曰クソクラテス氏ハアゼ
ン人ノ信ズル神ヲ信ゼズシテ新異ノ神ヲ説ク其罪一ナリ
妖説ヲ唱ヘ天下ノ少年子弟ヲ惑ハス其罪二ナリ此二罪天
人共ニ許サマル所死ニ當レリト氏之ヲ聞キ毫モ意ニ介セ
ズシテ曰ク予ハ晴天白日ノ身ナリ何ゾ法庭區々ノ辨論ヲ

要、セ、ン、ヤ、予、ガ、一、身、ノ、行、ハ、千、万、言、ノ、辨、論、ニ、勝、ル、ベ、シ、ト、又、曰、ク、假、令、予、ハ、冤、罪、ニ、死、ス、ト、モ、亦、何、ヲ、カ、悲、マ、ン、予、ヤ、老、ヒ、タ、リ、天、尙、ホ、予、ニ、年、ヲ、假、ス、モ、予、ハ、只、益、々、老、衰、ヲ、加、ヘ、耳、力、目、力、才、力、皆、共、ニ、衰、弱、ニ、歸、セ、ン、ノ、ミ、此、ノ、如、キ、身、ヲ、以、テ、永、ク、人、間、ニ、生、活、ス、ト、モ、又、何、ノ、益、カ、ア、ラ、ン、且、余、レ、今、死、ス、ト、モ、不、正、ノ、刑、ニ、死、ス、ル、ナ、リ、故、ニ、其、死、ヤ、法、官、自、ラ、己、ヲ、汚、ス、ノ、ミ、焉、ゾ、能、ク、我、ヲ、汚、ス、ヲ、得、ン、管、ニ、我、ヲ、汚、ス、能、ハ、ザ、ル、ノ、ミ、ナ、ラ、ズ、却、テ、天、下、後、世、ヲ、シ、テ、予、ヲ、憐、ミ、予、ヲ、愛、ス、ル、ノ、情、ヲ、増、サ、シ、メ、ン、ト

○裁判、ツクラテス氏ノ法庭ニ出ルヤ舉動從容タリ是レ罪人ノ其罪ヲ逃レント欲スルニ非ズシテ無罪ノ人其無罪ヲ陳グル者ナレバナリ弟子友人亦之ガ爲ニ辯護セリト雖也遂ニ二百八十一人ノ同意ヲ以テ有罪ニ決セリ蓋シ當時ノ法律タル凡ソ罪ヲ得ルモ金ヲ出シテ之ヲ贖フヲ得タリシカバ或ハ之ヲ氏ニ勸ム氏怒リ曰ク贖金ヲ出スハ即チ贖フヘキ罪アレバナリ噫予功アルモ罪ナシ何ヲ贖ヘト云フ耶ト、是ニ於テ氏ヲ有罪トスル者更ニ八十八人ヲ加ヘ遂ニ死刑ノ宣告ヲ受クルニ至レリ此時氏起テ演說シテ曰ク嗚呼アゼンノ人ヨ諸子ハ予ヲ死刑ニ處セリ然レモ是レ

僅ニ予ガ數年ノ生ヲ奪フニ過ザルナリ、見ヨ余ハ老イヌ死期己ニ近キニ在リ苟モ予ヲシテ殘年ヲ保ダシメント欲セバ亦難キニ非ザルナリ予ハ決シテ予ノ冤ヲ雪ク能ハズシテ空シク死ニ就クニ非ザルナリ數年ノ殘齡ニ縊縊シテ死ヲ免レンコヲ欲セザレハナリ、士ノ或ハ戰場ニ臨ミ或ハ法庭ニ登リテ汲々死ヲ免レンコヲ求ムル是レ耻ナリ戰敗レ敵ニ捕ハル、時ニ當リ其兵器ヲ投シ地ニ伏シテ憐ヲ乞ハ、其死ヲ免レンヤ必セリ、然レモ士君子ノ爲スベキ所ニ非ザルナリ嗚呼アゼンノ人ヨ死ヲ免ル、ハ難キニ非ズ罪ヲ免ル、難キナリ罪ヤ長足其人ヲ追フ、死ヨリモ早シ予ヤ老イヌ歩行モ亦遲シ二者ノ中其遲キ者(死)今我ニ超過セントス、然レモ其速ナル者(罪)ハ忽チ活潑迅速ナル諸子ヲ追ハントス今ヤ諸子ハ予ヲ死ニ處セリ、然レモ眞理ハ亦諸子ヲ有罪ト爲ス可シ予ハ予ノ刑ニ服ス諸子ハ諸子ノ刑ニ服セザル可ラズ予死スルノ後諸子必悔ユル所アラシ、嗚呼人ヲ殺スハ己ノ罪惡ヲ掩フノ道ニ非ザルナリ、終ニ臨ミ尙ホ一ノ諸子ニ願フ所アリ予ガ兒孫生長ノ後徒ニ富貴榮華ヲ求メ而シテ德ヲ求ムルコトナクンバ之ヲ譴

罰セヨ亦得ル所ナクシテ自ラ高シトスルヲアレバ之ヲ呵責セヨ若シ果シテ此ノ如クンバ予及ヒ予ノ兒孫ハ諸子ヨリ無上ノ賜ヲ受クルナリ今ヤ相別ル、ノ時至レリ我ハ死ニ就キ諸子ハ生ニ安ンズ然レモ其孰レカ幸孰レカ不幸蒼々タル彼ノ天唯之ヲ知ルニアランノミト

○獄中、右ノ演說終リテ後直チニ獄ニ入ルヤ神色自若トシテ平日ニ異ナラズ吁聖人ノ獄ニ在ルヤ獄其獄ニ非ザルナリ爾時正ニ祭禮ノ奠アルニ際シ人ヲ死刑ニ處スルヲ得ズ是ヲ以テ氏獄ニ留ル卅餘日其間クライトープラトー及ビ門人故舊日々來訪ス氏之ト談笑スルヲ獄ヲ忘レタル者ノ如シ人或ハ逃亡ヲ勸ム氏聽カズ且ツ曰クアツチカノ外人間死ナキノ地アリヤト既ニシテ三十餘日ヲ經過シ死刑ノ當日ニ至リシガ此日ハ門人ヲ招集シテ靈魂不滅ノ事ヲ講ゼリ講議終リテクライトー後事ヲ命セラレンヲ請フ氏曰ク平日告クル所ノ外他ニ希フ所ナシ汝若シ能ク予ガ教ニ從ヒ已ヲ處スルヲ得バ今日一言ノ約ナキモ汝ノ爲ス所尽ク可ナラン子若シ身ヲ淑クシ德ヲ修ムルヲ能ハズンバ今數萬言ノ約ヲ爲スモ益ナキノミトクライトー次ニ

葬式ノヲ問フ氏先ツ汝ガ意ニ任スト答へ且ツ歎シ曰ククライトーヨ子ハ我ヲ此肉体ナリト思フ故ニ斯ク埋葬ノ事ニ苦慮スルナリ我曩ニ一條ノ講義ヲ爲セシニ子ハ毫モ悟ル所無キカ予ハ毒ヲ吞ムヤ直チニ諸子ト相別レ樂土ニ赴クコトヲ解セザル耶予ガ今迄諸子ヲ慰メ且自ラ慰メンガ爲メニ語リシモノハ尽ク無効ナル耶死後予ガ屍ヲ取テ之ヲ燒クモ埋ムルモソクラテスハ何ノ苦痛モ覺エズ何ノ關スル所ナキヲ信スベシ子ノ埋ムル者ハ予ノ体ノミ我ニ非ルナリト此日氏ノ婦人三子ヲ攜へ來テ別ヲ告ク氏家事ニ就キ教訓ヲ遺シテ促シテ家ニ歸ラシメタリ

○死刑、已ニシテ夕陽將ニ沒セントスソクラテス氏クライトーニ謂テ曰ク時至レリ毒何クニアル（當時風俗死刑ハ日沒ノ時ニ行）クライトー曰ク日猶西山ノ上ニ在リテ未ダ沒セズ且ツ夫レ時已ニ至ルモ猶飲食ヲ事トシテ毒酒ヲ用非ザル比々皆是ナリ先生何ゾ急ナルヤト氏曰ク其輩ハ毒ヲ吞ム遲ケレバ爲ニ得ル所アリト思へバナリ嗚呼其レ何ノ得ル所アラン徒ニ其寸間ノ生ニ繼續タルヲ示シ世人ノ笑ヲ招クハミ嗚呼クライトーヨ子ガ言ニ違フ勿レト是ニ於テクラ

イトー獄吏ニ命シテ毒ヲ致サシム氏獄吏ニ問フテ曰ク愛友此毒ノ用法如何請フ示教セヨ獄吏曰ク用法亦易キノミ吞下セバ直チニ起テ歩セヨ暫クシテ足ノ重キヲ感セン然ルキ坐ニ就ケ氏自若默禱シテ杯ヲ傾ク門人等此ニ至テ覺エズ潜然タリ氏之ヲ觀テ曰ク諸子コレ何事ヅヤ曩キニ家族ヲ歸ラシメシハ此等ノ事ナカラシム欲スレバナリ諸子ハ男子ニ非ザル乎衆皆悄然タリ氏獄吏ノ命ニ從ヒ暫ク歩行セシガ果シテ漸ク足ノ重キヲ感ズルニ至レリ依テ天ヲ仰テ臥ス暫クアリテ更來リ氏ノ足邊ヲ捻リ感ズルヤ否ヤヲ問フ氏毫モ感スルコト無シト答フ暫クアリ又肱ノ邊ヲ捻ル痛痒ヲ感セザルコト前ノ如シ此ノ如クニシテ其胸部ニ及ブキハ則チ死期ナリ命將ニ絶ヘントス氏遽カニ其面部ヲ覆ヘル白布ヲ去リクライトヲ呼ンテ曰ク予曩キニイスキラピアスヨリ一羽ノ雞ヲ購ヒ未ダ代價ヲ與ヘス幸ニ之ヲ償ヘトククライト曰ク諾セリ先生復言フベキ者アリヤ氏亦答ヘズ暫クアリテ氏ノ手足伸張ス吏面部ノ布ヲ去レバ兩眼尙ホ開ケ光ナシククライト潜然トシテ之ヲ閉ズプラト曰ク此レ至善至智至仁ノ最後ナリ、シセロ曰ク

予、涙、ヲ、流、サ、ズ、シ、テ、此、章、ヲ、讀、ム、能、ハ、ズ、ト

○アセン人ノ後悔、ソクラテス氏ノ死セシハ紀元前三百九十六年ニシテ實ニ其齡七十有餘ノ時ナリキ門人厚ク之ヲ葬リ後患ヲ恐レ國外ニ遁ルアセン人ハ後大ニ前非ヲ悔ユ遂ニ氏ヲ讒セシ者ヲ罰シ且ツ門人ノ難ヲ避ケテ各地ニ離散スル者ヲ召還シ待遇ヲ厚フス且ツ氏ヲ追悼セン爲メ一時各種ノ遊戲ヲ停止ス又名工ヲシテ氏ノ銅像ヲ作ラシメ之ヲボムヘイアムニ安置ス後疫病ノ行ハル、ニ當リ心中大ニ恐ル、所アリ依テ劇場等ニ於テ氏ノ名ヲ呼ブコト禁ゼリ嗚呼陰雲日月ヲ掩フモ日月ハ遂ニ見レザルヲ得ザルナリ聖人ノ德其レ猶日月ノ如キカ

○容貌、婚姻、性質、ソクラテス氏ノ容貌ハ決シテ秀美ト稱ス可ラズ禿頭ニシテ色黒ク鼻低クシテ眼凸出シ顔色ハ悲愴タリ或時占者氏ヲ相テ曰ク惡心ヲ胸裡ニ藏シ惡德ニ溺ル、者ナリト其友人怒リテ占者ヲ責ム氏之ヲ止メテ曰ク予ノ心實ニ兇惡ヲ以テ充ツ唯吾能ク之ヲ制服スルナリ占者予ヲ欺カズト容貌ハ此ノ如ク不揚ナリト雖モ其德トオトニ富メルコトハ

古今北領少シトス辨說亦神妙ナリ初メ氏ノ顔色ヲ見テ甚

人娶若婦、其必謀再婚、瑣謂此乃福、幸受此暴橫、理學

古今比類少シトス辨說亦神妙ナリ初メ氏ノ顔色ヲ見テ甚
 ダ悅バザリシ者モ一タビ其清朗ナル聲ヲ聞ケバ感歎贊稱
 シテ已マズアルチピアデス嘗テ曰クツクテス氏ノ傍ヲ
 過クル者ハ耳ヲ掩テ走り去ラザルヲ得ズ何トナレバ一タ
 ビ其聲ノ耳ニ入ルアレバ愉快極リ時ノ將ニ移ラントスル
 ヲモ忘ルレバナリト實ニ誣言ニ非ザルナリ氏ノ婦ザンチ
 ヲプハ其性極メテ妬悍ナリシガ一日氏友人ト家ニ在リ婦
 大ニ怒ル氏敢テ之ト争ハズシテ友人ト外出ス婦人急ニ樓
 ニ登リ水ヲ取テ其禿頭ニ注ゲリ氏頭色自若顧ミ友人ニ語
 リテ曰ク雷後ノ雨予豫メ此事アルヲ知ルト其他サンチツ
 プノ短氣ヲ以テ其夫ヲ苦メシヲ數々ナリ或人氏ニ何故ニ
 此ノ如キ婦人ヲ娶リシヤト問フ氏曰ク馬術ニ長ゼント欲
 スル者ハ先ツ悍馬ヲ撰デ之ニ乗ル已ニ能ク悍馬ヲ御スル
 ヲ得バ他ハ與シ易キノミ予ヤ人ト共ニ居リ人ト共ニ談論
 講話スルヲ以テ一生ノ目的トス故ニ此婦ヲ娶レリ予善ク
 之ニ堪フルヲ得バ天下又與シ難キノ人ナカルベシト中村
 敬宇先生愛敬ノ歌ニ言ヘルアリ曰ク

西哲瑣刺底、其妻性頑硬、拂意動輒怒、百事悖命令、他

人娶若婦、其必謀再媾、瑣謂此乃福、幸受此暴橫、理學
 根脚堅、試驗要風勁、妻氣百變動、瑣性一泰定、妻躁情
 如火、瑣靜心如鏡、砥因愛敬深、後世稱為聖、

善ク聖人ヲ詠シタル者ト云フベシ

ゼノフラン嘗テ其師ヲ評シテ曰ク夫子ハ神ヲ敬セリ何事
 モ先ツ之ニ謀ラズシテ爲セシヲナシ夫子ハ人ヲ愛セリ其
 交ル所ノ人ニ恩惠ヲ與ヘシヲ數フヘカラズ未ダ秋毫モ人
 ヲ害セシヲナシ夫子ハ寡慾ニシテ且ツ潔白ナリ未ダ曾テ
 分ニ過ギ度ヲ失シタル身心ノ慾ヲ充タセシヲナシ夫子ハ
 用意周到ナリ未ダ曾テ善惡ヲ誤リタルヲナシ又其判定ニ
 苦シミテ他人ヲ煩ハセシヲナシ夫子ハ才智ニ富メリ天下
 ノ事一トシテ精細ニ論定スル能ハザルナシ又能ク人ノ肺
 肝ヲ看破シ其惡ヲ抑ヘ善ヲ勸ムルノ好時機ヲ知り、吁我
 師ノ諸德實ニ此ノ如シ豈之ヲ至善至智至仁ノ人ト謂ハザ
 ルヲ得ンヤ世若シ我言ヲ疑フ者アラバ請フ行テソクラテ
 ス氏ヲ見テ之ヲ他人ト比較シ以テ之ヲ其心ニ問ヘト

結論

予ハ始メニ言ヒシ如ク哲學者タルソクラテス氏ヲ示スニ

非ズ一聖人タルソクラテス氏ヲ示シタルナリ嗚呼吾輩ハ
 尽ク哲學者ニ非サル也又哲學者タルヲ要セザルナリ然レ
 モ吾輩ハ皆人ナリ故ニ宜シク善人タラシク勉ム可キナリ
 人ノ學フヘキ所ノ者ハ人ナリトハ是レソクラテス氏ノ語
 ニノ蓋シ千古ノ名言ナリ人ヲ學ブトハ則チ已ヲ知ルノ謂
 ナリ已ヲ知ルノ方一ニ足ラズト雖モ之ヲ要スルニ二方
 ヲ出ス曰ク人ヲ觀ルナリ曰ク已ヲ顧ルナリ而シテ此二者ハ
 互ニ相須テ其功ヲ奏スル者也諸君ハ今ソクラテス氏ヲ見
 ラレタリ果シテ其聖人タルヲ覺ラレシナラン東西相去リ
 古今相隔タルト雖モ彼我ノ間亦甚ダ相近キ者アルヲ悟ラ
 レシナラン彼モ人ナリ我モ人也我何ゾ必ズシモソクラテ
 ス氏タルヲ得ザランヤトノ慷慨ヲ惹起サレシナラン其レ
 然リ諸君ハ已ニ其人ヲ見タリ然シテ又自ラ顧ル所アリテ
 人ノ人タル所以ノ道ニ於テ或ハ發明セラル、所アラバ是
 レ余ノ幸ニシテ亦諸君ノ幸ナリ

茲ニ諸君ノ予ガ長談ヲ靜聽セラレタルヲ謝ス

批評

地質局印行地質及地形圖。同局ノ地形圖ニ就テハ出版毎

ニ本誌ニ於テ批評ヲ下セシガ、今回モ一言ヲ述ベントス、
 新圖ハ前例ニ據リ比例尺二十萬分ノ一ニテ二尺ニ一尺半
 ノ圖幅ナリ、地上ノ凹凸高低ハ曲線ヲ以テ記セシ者ナレ
 バ一目シテ彼邊ニ峻嶮ナル場所アリ那處ハ平原ナリト甚
 ダ明瞭ナリ、地圖ノ精密ナルト製圖ノ上出來ナルコトニ就
 キテハ課長關野氏ニ向テ其ノ勞ヲ謝セザルヲ得ズ、今回
 ノ地圖ハ水戸、前橋、甲府圖幅ノ三ナリ、之ヲ既刻ノモノ
 即チ千葉、安房、東京、橫濱、伊豆、靜岡ノ六圖幅ト合セバ
 東京近縣地圖完全トナレリ、追々夏期ニ際シ避暑、避病ヲ
 兼テ旅行セントスル人ニハ定メテ善キ道志留邊ト爲リヌ
 ベシ、此ノ上ニ日光及ヒ上田圖幅成ルニ於テハ日光ノ名
 所及ヒ伊香保、妙義山等ノ好景ヲ尋ヌルニ極メテ便益ア
 ルコト些少ナラザルベシ、因ニ云フ全體本邦人ノ旅裝ヲ見
 ルニ荷物多量ナリ、中ニハ甚ダ必要ナラザルモノ大部ヲ
 トメ反テ必需品ヲ飲クガ如シ、煙草ノ儲蓄、上草履、鏡臺
 讀ミモセヌ大部ノ書籍等殆ント一家ノ動財產ヲ舉ゲテ携
 フル人アリ之レガ爲メニ容易ニ轉地スルコト能ワズ、之ニ
 反シ西洋人ノ必須飲ク可ラザルト見做ス地圖及道中案内

記ハ携帶セサル人多シ、此ノ地形圖トサトウ氏ノ案内記

(Satow's Hand-book for Japan)

横濱ケレ一社
販賣五圓

ヲ持參セバ

上草履ニ勝ルコト百倍ナルヘシ、或人獨國ヨリ意多利ニ旅

行ノ節ライプチヒ大學法學教授クンチツユト同道セシニ

澳國ニ境稅關ニテ檢査ノ際小草靴ヲ開シヲ傍觀セシニ莫

大小ノ上下、二對ト靴下三枚ノ外ニ地圖ト案内記アリシ

而已ナリ、斯ノ如ク洋人ノ旅裝ノ輕便ナルニハ實ニ驚ク

ニ堪エタリ

地質圖ハ横濱静岡、前橋ノ幅ナリ、地質ノ系統ハ始原、太

古、中古、近古、後近古元ノ岩石ヨリ成リ立チ又火山岩大

部ヲトムル所ロアリ富士四近其ノ著シキモノナリ、岩石

ノ種類ハ皆色分ニテ着色セシモノナレバ那邊ニ何石、彼

邊ニ彼石アリト一目判然タリ三圖俱ニ地質本調査ナレヒ

學問上ノ評價ヲ下セバ間然スル處ロナキニシモ非ラズ、

後々ノ地圖ニハ多少改良アランヲ望ム B.N.

應 問

本雜誌第五十六号小藤先生ノ地文學講義筆記

(五百十九
葉ノ表)

ノ潮汐ノ理論中左ノ如クアリタリ月球ハ二六、五四五、〇

三八倍(二六、四四五、〇三八)太陽ヨリ小ナルモ月球ノ

地球ニ近キヲ太陽ヨリモ殆ンド三百八十七倍ナレバ月球

ノ地球ニ與フル牽引力ハ太陽ヨリモ二倍ノ勢力ヲ有スル

ナリト小生ノ考ニテハ引力ノ強弱ハ實質ノ多少ニ正比シ

距離ノ自乘ニ倒比ストノ引力ノ規則ニヨリ左ノ算式ヲ生

ズベシ即チ

地球ノ引カ

月球ノ引カ

距離

太陽ノ引カ

太陽ノ引カ

26545038

= 177

35925

149769

右ノ式ニヨルト尙ホ太陽ノ引力ハ百七十七倍余ノ強カヲ

有スル割合ナリ併シ如何ナル理アリテ然ルモノナルヤ

質問者ノ問ヲ委敷開説スルニハ五月蠅キ天文學ノ事ニ立

入ラネバナラヌ次第ナリ、并ハ併シ小生ノ専門ニ非ラズ

依テ質義ニ關シ左ニ大略ヲ述べ申サン

一、天体ニシテ他ノ天体ニ潮汐ヲ起サシムルカハ距離ノ

三自乘ニテ減却スノコトナリ、若シ左様ナレバ月ハ太陽ヨ

リ小ナルニモセヨ地球ニ距離ノ近キニ因リ潮汐ヲ地上ニ起サシムルカハ大陽ヨリモ二倍餘強キヲ簡單ナル算術ニテ明瞭ナリ

大陽ノ地球ヨリ大ナルヲ 324,479 ナリ又地球ノ月ヨリ大ナルヲ 81,5 ナリ、然レバ大陽ノ實體ノ月ヨリ大ナルコド 324,479 × 81,5 ナリ、併シナガラ大陽ノ地球ヲ遠ザカル距離八月ノ地球ニ於ケルヨリモ 386,7 倍ナリ故ニ

大陽ノ地上ニ潮汐ヲ起スカ八月ニ比較スレバ

$$(324,479 \times 81,5) : (386,7) = 0,4574 \text{ ナリ}$$

之ヲ翻言スレハ月ノ力大陽ヨリモ 2.186 倍強シ右ノ理由ナレバ大略講義ノ事柄氷解セシナラン若シ質義者ノ言フガ如クナレバ月ノ影響而已ニテモ毎日于滿ノ潮汐ノ際水面ノ差可ナリ著シキモ大陽ノ力百七十七倍ナレバ一晝夜二回東京ノ如キ低地ハ水中ニ浸サル、道理ナルベシ

B. K.

質 問

標本

壹ヶ(別封)

封中ニアルモノハ極テ薄ク組織緻密ナル灰色紙ノ如キモノアリ

右ノ標本ハ搗キ栗ヲ入レタル箱ノ空所ノ四方ニ附着シタル一片ナリ蓋裏ニ粘着シタルモノハ縦五寸巾四寸程モア

リシ

粟ハ少シモ蠹食ノ害ナク隨テ無血虫類蠢動スルヲ見ズ此ニ其概畧ヲ述べ貴社ニ寄セ高説ヲ仰グ若シ説明ヲ得バ幸甚幸甚

三重縣龜山

伴 秀

應

理科大學動物學教室

池田作次郎

質者ノ送レル者ハ蓋シ蛾ノ蛉虫ノ將ニ成虫コナラントスル節作リタル者ナラン

現ニ余ハ昨年新潟縣古志郡下新町村池田作衛宅ニテ尙ホ乾キ終ラザル「モメン」綿ニ害ヲ爲シタル小サキ蛾ノ蛉虫(昨年ハ此虫ノ發生シタルヲ最モ甚シ)ノ夥シクハイ出デ、物置場ノ天井板ニ凡ソ五六尺四方ノ内一面ニ質者ノ送リタル者ト同様ノ物ヲ作り久シク其内部ニ潜ミ居リ遂ニ羽化シテ飛ビ出デタルヲ實見シタリ

過日動物採集ノ爲メ府下八丈島ニ行キタル節同島大賀郷村ノ村役人菊地種三郎氏モ亦質者ノ遺リタルモノト正シク同質ノ膜ヲ携ヒ來リ余ニ示セリ當時其子細ヲ尋ヌルコ

同ジク搗キ粟ヲ入レ置ク俵ノ表面ニ附着ナシ居ル者ニテ
 粟俵ノ中ヨリ生ズル小サキ蛉虫ノ作りタル者也（其害亦
 少シカラズト）且其蛉虫ハ菊地氏ノ陳述ニ依レバ蛾ノ蛉
 ナルヲ更ラニ疑タガイ無キ如シ然ラバ二者共ニ同一種蛾
 ノ蛉虫ノ作りタル者ナルコト明也併シ余ハ未ダ其羽化シ
 タル成蛾ヲ得ザレバ其蛾ノ果シテ如何ナルモノナルカ敢
 テ質者ニ明答スル能ハザルヲ只管遺憾トス
 八丈島ニテ菊地氏ノ携ヒ來リタルハ者ハ僅ニ縦七八寸横
 五六寸ニ過ザレヒ其大ナル者ハ方一尺餘ニ達スルヲアリ
 ト（實物ハ理科大學動物學教室ニアリ）又八丈島ニテ之ヲ
 粟ノ穗虫ト稱ス
 質者ハ粟ニ少害ダモ受ルコトナク又無血虫ノ蠢動スルヲ
 見ズト報ズレヒ恐ラク是レ成蛾ノ既ニ羽化ノ飛ビ去リタ
 ル後ニ稍ク心附カレタル者ナラン故ニ再ビ細探ノ勞ヲ厭
 ハザラバ或ハ其蛾殼ナリヒ見當テルヲ得ルナラン然リ
 ナガラ再探ノ上猶ホ余ノ考察ノ正當セザル点アラバ實物
 ノ箱ナリ俵アリ其附着ノ儘（其局部）送り玉ハ、幸甚

明治二十年六月十日

社告

東洋學藝雜誌第六十八號

明治二十年五月廿五日發兌

目錄

○自殺の話（前号の續）

穂積 陳重

○伊國ノ硫黃鑛業ヲ説キ併セテ本邦ノ該業ニ施スベキ改良方案ヲ述フ（前号の續き）

渡邊 渡

○硬骨魚大脳ノ作用

石川千代松

○動物及人類の頭骨

小金井良精

雜報數件

雜錄

○蝦夷人の長歌

永田方正譯

寄書

○尾崎弘道氏ノ政教新論ヲ讀ム

内田周平

植物學雜誌

第四号明治廿年五月廿五日發
兌壹册金十二錢郵稅壹錢六册
前金郵稅共七十二錢

論說○問荆實驗(圖入)理科大學柘植千嘉衛君○蠶の說第
二(圖入)田中延次郎君○もくらんニ就テ述ブ(圖入)牧野
富太郎君○しろつふノ說澤田駒次郎君○食蟲草たぬきも
ノ說(圖入)理科大學染谷徳五郎君○花說理科大學三好學
君○雜錄○伊豆國旅行日記(前号の續き)○本色ヲ損セザ
ル醋葉製法○いてう(公孫樹)大木○會員發途○會員歸京

發行所 東京神田 裏神保町 **植物學會編輯所**
賣捌所日本橋通丸善書店○神田裏神保町澤屋書店

法學協會雜誌

第四拾号明治廿年六月廿日
發兌壹册金拾錢六册前金郵
稅共金六拾壹錢

演說筆記○法律思想普及ノ必要、大學總長渡邊洪基君演
述●論說之部○民事擔當人規則中雇主雇人ノ關係ヲ論ス
會員柴原龜治君●講議之部○英國商船法、法學士西川鉄
次郎君●判決例之部○好意運搬者責任ノ件法學士土方寧
君●問答之部○永代小作ニ關スル問答、法學士代言人高
橋捨六君●雜錄○法科大學討論會記事○明法志林○判事
登用試驗問題○法律雜誌

發行所 東京神田 裏神保町 **法學協會雜誌社**

帝國理科大學教授理學博士小藤文次郎君著
鑛物學初步 上下全二册正價金九拾六錢
郵稅金二十六錢

在英國文學士千頭清臣君著

論理指針

全五册ノ内卷ノ一正價金廿錢郵稅六
錢卷之二正價金廿四錢郵稅八錢卷之
三價金廿八錢郵稅八錢以下近刻

在英國文學士千頭清臣君著

經濟學一覽表

全壹册正價二十錢
郵稅貳錢

理學士平賀義美君著

染色術摘要

全壹册正價金貳圓五十錢
郵稅金四十錢

文部省參事官吉村寅太郎君題辭大日本教育會理事日下部

三之介君序福岡縣尋常師範學校南守謹吾君口述

心性教授要論

全壹册正價金壹圓
郵稅三十四錢

蘆田東雄君譯

英國史直譯

正價金六十錢
郵稅貳十六錢

The Floricultural Cabinet, and Florists

Magazin 全七册古本美麗採色圖數十種入り價金貳拾圓

New General Biographical Dictionary, By Rev. H.

J. Rose. B. D. 古本全十册參拾圓

右發賣仕候間續々御用奉願候

發賣所 東京神田 裏神保町 **澤屋井上蘇吉**

東洋學藝雜誌第四卷第七十號

らなかつたですが、十七世紀の始めよ至りまして彼の有